
うきぐもがたり

towa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うきぐもがたり

【Nコード】

N4649S

【作者名】

towa

【あらすじ】

たいそう気位の高い姫が望むのは、「一番に位が高く、見目好く優しく逞しい殿方」。国王夫妻があきれ果てて嫁ぎ先を諦めていたところへ、まさに望み通りの婚姻話が舞い込んできます。しかし、相手は軍事国家と名高い野蛮な歳火^{さいか}国王。妥協した姫はしぶしぶ、いえ、野心を抱いて嫁ぐことを決意しました。私が国を乗っ取ってみせる、と。

序章 とわずがたり（前書き）

登場人物紹介

示詩……十八歳。赤社国の第一王女。黒髪に濃緑の瞳の美少女。高飛車で意固地。でありながらも母の恋春を世話し一城を取り仕切っていたことから意外に世慣れているところもある。理想のタイプは「位が高く、見目好く優しく逞しい殿方」

座龍……二十七歳。歳火国第二十一代国王。黒髪に緋の瞳の逞しい武人。自由闊達、奔放な性格でありながら、周りを気遣うこともできる。が、掴みづらいたころもある。理想のタイプは「食いでのある色っぽい美女」。

竜脊……七歳。座龍の實の息子。母親は今のところ不明。座龍いわく「手のつけられない悪ガキ」らしいが、非常に落ち着いて大人びた発言をしたりもする。しかし、好奇心は隠さない。

光野……十九歳。座龍の近衛であり、学友。また座龍の教育係であった朱平の息子でもある。真面目で誠実な性格の苦勞人。

陽炎……年齢不詳（恐らく二十代前半）。座龍個人の監察、斥候。常に気配を絶っており存在感が薄い。無口で無表情、命令には忠実。

桃衣……十六歳。歳火国における示詩の側付きの侍女。武家だが田舎育ちで、優しく情細やかでよく気がつく。よく見ると整った顔立

ち。

緋仔^{ひこ}……二十歳。竜を研究している歳火の竜学士であり、若くして優秀な成績を修める天才。しかし言動がかなり奇抜で、かなりどもる。

燈源^{とうげん}……五十六歳。歳火国の最高神官であり、先代王の弟。座龍の叔父。非常に気さくな人格者。熊の様な外見をしている。

沃賀^{よくが}……五十二歳。竜学士の長であり、竜志学所の学長。数多の権力を手にしており、王族にも横柄な態度を見せる。

律草^{りつそう}……四十歳。赤社国の現国王。気が弱く、娘の示詩よりも威厳が無い。

茶示^{さい}……三十一歳。赤社国の王妃。示詩の義理の母親。

天轟^{てんこう}……座龍の所有する騎竜。王竜。普通の騎竜よりかなり大きい。

序章 とわずがたり

このお話は、私が見聞きして参りました、哀しくも美しいお二人のお話でございます。

かつて仕えておりました歳火国さいかの王宮の侍女であった私は、第二十一代歳火国王「座龍ざりゅう」様のご正室であらせられます。「示詩しじ」様のお側付きでありました。

示詩様は少しご気性の激しい所がおりで、それ故に、なさらなくともよい苦勞をなさるような、不憫なお方ございました。

対して、座龍様は、恐れながらおなごに対して薄情なお心をお持ちあそばされている方でございます。まるで浮雲のように正体の掴めぬお人柄ございました。

そのようなお二人でしたから、あれやこれやと、実に様々な問題をお抱えになつてはお苦しみになつておられました。

ですが、そのような難事を乗り越えられたお二方は、私たちの心配をよそに、春の陽気に根雪が溶けていくかのように、ゆっくりと仲を深められていったのでございます。

そのようにお幸せなご様子をお見せになりながら、世ではまったく逆の、醜聞にも似た噂が広まってしまったということには、人という生き物の業を見せつけられた心地がいたしました。

現国王であらせられる「竜脊」^{りゅうせき}様が、お二人の真の姿を公表なさらなかったのも、人の罪深さを知っておられたゆえにございましょう、浅薄な私には分かりかねることではございますが。

けれども、あのように思い思われていたお二人が亡き今になって、悪口雑言で貶められているのを耳にするたび、私は思うのでございます。

5

表面では解せぬ、人の心の奥深さを。

正体なき心を縛る、人の想いの連なりを。

そういった、世を渡る上で腹の足しにもならぬ真実を、言わずにおれなくなるのです。

さて、そんな私めの戯言に、それでも興味を削がずにおられたならば、どつどつ拝聴下さい。

腹の足しにはならずとも、人の世を慰める慈雨のように、美しいお話でございますゆえ。

其の一

西の大国「歳火^{さいか}」と北の大国「業碧^{ごうへき}」が一線を交え、歳火に軍配が上がったのは、もう七年も前の話になる。

果ては歳火の属国と成り下がるかと思われた業碧だったが、いくつかの条件を受諾すること、領地の一部を献上することで事なきを得た。

意図したかどうか、それは結果的に歳火の軍事力と懐の深さを近隣諸国に知らしめることとなった。

その後、戦の総大将を務め上げた歳火の第三王子「座龍^{ざりゅう}」は名実共に歳火国第二十一代王となり、現在まで無二の武王として君臨し続けているのだった。

そんな歳火国王から、西南の中立国である「赤社^{せきしゃ}」に使者が遣わされたのは、秋も暮れの終わり頃。

穀物の収穫を終え、冬に向けての蓄えの準備に差しかかるうという時期だった。

「なんと、困ったことになった……」

「ええ、本当にそうですわねえ……」

謁見室の玉座に埋もれて腕組みする、瘦せぎすの、少々威厳に欠ける男が赤社の王「律草^{りつそう}」である。そして、その傍らに立って頬に片手をあてがってため息をついたのが、妃である「茶示^{ちさし}」だ。

二人は、歳火の使者が持ってきた書状にもう一度目を通すと、やはりもう一度、二人揃ってため息を吐きだした。

書状は、婚姻によって絆を深め、両国の更なる発展を願いたい、と、つまりは婚姻による同盟の申し出であった。

これは、これといった特色も国力もない小国の赤社にとっては願っ

でもない申し出である。本当ならば一も二もなく快諾の返書を送りたい所だったが、向こうが「妃に」と指定してきた相手には、少々難があつた。

「よりもよつて、あの娘とは…」

「ええ、よりもよつて…」

言つて、またも二人は書状に目を落とす。

いくら読み返そうとも、その名前はきちんと記されているし、内容が変わることもない。

「一の姫、示詩^{しし}」。

下の姫二人を早くに嫁がせたのは失敗だったか。よもや、歳火ほどの大国が赤社に婚姻を打診するなど思つてもみなかった当時、律草はすでに示詩以外の姫たちを他国へ嫁がせていた。

残るは示詩と、あとは王位を継ぐ王子たちのみ。

王と王妃は思わず頭を抱えなくなった。

示詩は、赤社一美しいと歌われた美姫だった。

だが、性格はその美しさと対極にあつた。

蝶よ花よと甘やかされて育つたせいか、氣位が高くなつてしまったのだ。

「お久しゅうございます、父上、義母上」

鈴を転がしたような、というには張りのあり過ぎる高い声が響いた。王室に張本人である示詩を呼んだ律草は、齡十八という適齡期をいくらか過ぎたおのが娘を改めて眺めやつた。

ぱつちりとした濃緑の瞳に、意志の強そうな濃いめの眉、すつと通った鼻梁の下に咲く可憐な唇、それらをかたどる卵型の白い面。黒く艶やかな長髪は後ろで簡単に結びあげられ、水のように滑らかに背中へと流れている。

前髪は、眉の上できつちりと揃えられていて、隣国の邪九馬やくまで名物とされる白磁の人形のように愛らしい。

そして、漲る自信から来るものか、内側から漏れ出るような輝きが、彼女の美しさをよりいっそう顕著なものにしていた。

わが娘ながら実に美しい、と、律草は今度は感嘆のため息を漏らす。秋らしい、薄紫や濃茶など落ち着いた色の服装束をまとった示詩は、清楚で凜とした立ち姿とは似合わぬ、幾分か荒々しい足取りで王の前へ進み出た。

「うむ、よお参った、示詩。しばらく顔を見せなんだが、息災であつたか？」

律草は、かたい雰囲気きんぎの示詩を和ませようと猫なで声を出した。しかし、顔を見せる機会を作らなかつたのは王その人である。それを知らぬ示詩ではなく、無理に親密さを作ろうとしている父を無視して本題に入った。

「そのように要領を得ぬお話よりも、一体どういった御用がおりで私をお呼びになったのか、そちらをお聞かせ願いたく存じます」
小さくとがった鼻をつんとそびやかせて、示詩は睨むほど強い視線を王へと向けた。律草は、わが娘ながら自分よりも自身に満ち溢れている瞳に、一瞬たじろいでしまう。

示詩は、律草が若い時分に、後宮の位の低い側室に産ませた子だつ

た。律草には、示詩のほか二人の娘と三人の息子がいたが、その内、一番身分が低いのが示詩であり、しかし、一番気位が高いのも皮肉ながら示詩だったのである。

それでも、幼い頃は可愛さの余りなんでも言うことを聞いてやってしたが、妙に賢しら口をきくようになってきた十歳前後からは、厄介者を追い払うように母・恋春れんしゅんの離宮へ住まわせていた。

それ以来、示詩は催事や有事の時ぐらいいしか王宮には呼ばれなくなつた。

その罪悪感もあって、律草は示詩にだけは威厳ある王の態度がとれないでいるのだった。

「……しかし、立ち話では辛かるう。そこの椅子にかけなさい」

「いいえ、私はここでよろしいですわ。それで、話とは一体どのような」

堅い口調で頑として先を促す示詩に、王の隣にいた茶示がほう、と息をついた。

茶示は、この娘の気位の高さと小賢しさに、出会ったときからうんざりとしていた。

だが、このように長い時を経てはまだ落ち着いた娘らしさを持つとうとしない示詩に、今は苛立ちよりも憐れみが先だって感じられて、義母として複雑な気持ちになるのだった。

「これ以上の会話は無駄だということですね。分かりました。私の口からお話ししましょう。示詩、あなたに、歳火国から縁談のはなしが来ました。お相手は、勇名高き現国王座龍殿です。これがどういふことが、聡いあなたは分かりますね？」

煮え切らぬ王に代わり、妃は一気に用件を述べた。

最初こそ驚きに目を大きくした示詩だったが、話が途切れる頃には

落ち着いた表情に戻っていた。

「ええ、義母上。要するに、私を人質として、同盟を組むということですわね」

「な、なんということを…っ」

示詩のあからさまな言葉に、今度は王と王妃が目丸くする番だった。

「だってそうではありませんか。我が国より数倍国力に勝る歳火が縁談を持つてくるなど、いくら私が並みならぬ美貌の持ち主とはいえ利益が少なすぎます。ようは、中立国である赤社を、いざという時のために歳火側に取り込もうというのでしよう。歳火らしい、いかにも野蛮な発想ですわね。お断りさせていただきますわ」

示詩は一息に告げると、くるりと踵を返して出て行くとした。やはりそうきたか、と思いながらも王は慌てて引き止める。

「ま、待つのだ、示詩！そのように、決断を早まらずともよかろう！歳火の王であれば、お前が常々口にしていた理想の相手に不足ないではないか！何の不满があるというのだっ」

律草の隣で、茶示もこくこくと首肯する。

示詩は、王の言葉に反応してくるりと振り向いた。

「理想の相手、とは？」

手ごたえありと踏んだ律草は、さらに勢いをつけて歳火の王について知っている限りの情報を伝える。

「そつだ。お前は小さいころから、『嫁ぐなら一番に位の高い、見目よく優しく遅い殿方のもとが良い』と申しておつたではないか。歳火の座龍殿は、身分はさることながら、見目よく、下々の者にも親しげで、なおかつ列強においても並ぶものなき武勇の持ち主。まさに、お前が求めた通りの殿方であるう」

実際のところ、律草は七年前の戴冠式の時の一度きりしか面識はない。外見以外は噂から得た知識がほとんどである。

それにしても、一番に位の高い、見目よく優しく遅い相手など、この乱世においてほとんど巡りあう可能性はないだろう。

まして、赤社のように土地柄が良いことぐらいいしか取り柄のない弱小国では、不可能に近いほど過ぎた望みである。

それを逃す手は、示詩にとつてもないはずだった。

律草の思惑どおり、示詩は「理想の殿方」という言葉に著しい反応を見せ、眉間に皺を寄せて何事やら考えていた。

さもあるう、示詩ほど世事に長けている者なら、このようなど田舎の姫が、歳火ほどの大国に嫁げるなどまたとない好機であることを分からぬはずがないのだ。

「…まあ、百歩譲つて、位の高さで見目好い点は良しといたしましよう。ですが、歳火といえは軍事国家とは名ばかりの卑怯者の国ではございませぬか。先の戦でも、卑怯なる手段を用いて勝利を得たと聞き及んでおります。そのような蛮族の王、私に相応しい理想の殿方であるうはすもございませぬ」

口調はきついものの、示詩の頬は少しだけ朱がかって血色が良くなくなっている。

律草は、この小賢しい姫の詰め甘さを知っていて、それが今でも変わっていないようなので、内心ほくそ笑んだ。

こうと決めたら意志を曲げぬ示詩が、百歩譲つて、など殊勝な言葉を出したのは、合意の色ありということである。それでないなら、律草の説明を聞いた直ぐ後にも「御前を失礼いたします」などと、言つてさつさと退室していたことだろう。

あとひと押し、律草はそう睨んで、決め手となるであろう一言を添える。

「野蛮、野蛮と申すがな、示詩。それならば好都合ではないか。あちらの国では、女人も権力を手にすることができると聞く。もし座龍殿がお前に見合わせぬ殿方であれば、策を弄して寝首をかけ。そなたの色香を用いれば容易かろう。そうして、王妃という権利を行使してお前好みの男と今度こそ添うが良い。どうだ」

示詩は、今度は顔を俯かせて考え込んだ。

そのかわいらしい顔をどのように歪ませて思考に耽っているか窺い知れぬが、律草に手ごたえはあった。

「……それもそうですわね。私ほどの美姫が、歳火で甘んじられようはずありませんもの。果ては邪九馬の皇妃にもなれるほどの美貌、惜しんでどうなるのでしょうか。承知いたしましたわ、父上、義母上。私、座龍様の妃となり、見事歳火を乗っ取つてご覧に入れましょう」

険のあつた瞳の輝きが、今度は野心で燃え盛る炎の光にとって代わつた。

これでいて用心深い性格の示詩が、こうすんなりと転ぶのも珍しい。そう怪訝に思いはしたが、律草はこれで厄介者を嫁がせられると分かつてどつと肩の荷が下りた。

傍らでほつと息をついた妃も同じ思いなのか、目じりの皺を深めて安堵の笑みを浮かべている。

だが、顔を見合わせたところで、二人は一抹の不安を心によぎらせた。
意気揚々と謁見の間を去ろうとしているその華奢な背中に、なんらかの不吉な予感を感じてしまったのだ。

杞憂であってほしい。杞憂であれ。

そう願いはするものの、示詩がこれから本当に歳火で謀反を起こしかねないことを思うと、心痛の種は増えるばかりであった。

こうして、いささか間違った方向へ話がついてしまった示詩の縁談は、無事快諾の一途を辿ることになったのだった。

其二

歳火へ了承の意をしたためた書状を送ると、そこから話はあれよあれよという間に進んだ。

元より、歳火は赤社が断ることなど予想もしていなかったのか、婚礼の日取り、手順、その他諸々の事情などを次々に取り決め、赤社の口を挟む隙を与えなかった。

だが、そもそも赤社が何を言える立場でもない。

婚姻による歳火からの条約はこれ以上にならないほど垂涎もので、財政支援から貿易などの規定緩和、さらには歳火お得意の軍事技術の一部提供など、何くれとなく与えてもらえる内容だった。

そこへきて赤社側に要求されたことといえば、一の姫の引き渡し、これのみである。

どのような思惑があるにせよ、赤社にとっては渡りに船。出る文句も、快く飲み込んでしまおうというものだ。

どうせ愛想を尽かしていた娘の輿入れということもあり、国王夫妻ははいはいと、二つ返事で歳火の決定に従った。

輿入れの日取りが近づくにつれ、赤社の離宮「園恋宮」えんれんくうでは、慌ただしく準備をする侍女でこった返していた。

「はい、はい、皆、急ぐのですよ。もう出立まで日がありませんよ。そこ、手際が悪くてよ、もう少し手早く、かつ丁寧に扱いなさい。ああ、宝珠をそんなに大量に持っていつては、品を疑われますわ。そのぐらい、私の元で働くのなら覚えておいて」

右往左往する侍女の中で、ひと際声を張って指示を出しているのは、なんと嫁ぐ張本人の示詩であった。

姫らしからぬ、鬼気迫る表情で厳しく侍女たちを監察している。

これでは指示を受ける方もやり辛かろう、さもあらなん、侍女たちの顔には「もううんざりだ」という台詞が張り付いているかのようだった。

示詩がこんな風になったのは、園恋宮の本来の主人であるはずの恋春が亡くなつた5年ほど前の頃からだった。

国王に煙たがられ離宮へ移されてしまった恋春は、己の身を嘆いて酒と色に溺れるようになった。それがたたってか、若くして命を落としてしまっていたのだ。

示詩は、そんな母の自堕落な生活を見かねて、少しずつ宮の切り盛りをするようになっていた。

それがまた、拙いながらも目を見張るような手腕があり、宮の者たちもいつのまにか示詩を頼るようになっていた。

しかし、それだけで終われば美談でまとまるのに、そうはならないのが示詩という姫の性である。

自尊心の強い示詩は、言葉を真綿で包むということを知らないので、指示を受けた方は的確だが痛烈な一言を伴う言葉にいつも傷ついてしまう。

そのため、園恋宮で従事する者で、示詩を慕っている者は少なかった。

「ようやっと、わがままな女主人親子から解放されるのね」

「歳火ですって、野蛮な国にだけは行きたくないと言っておられたのにこの顛末ですもの、正直、いい気味よねえ」

「これで肩の荷が下りると思うと、せいせいするわ」

こんな言葉が、園恋宮の者たちの本心であつた。

そうして、示詩の監督のもとで拵えられた花嫁道具一式は、どこの国にも引けを取らない、完璧なものが揃えられて、あとは歳火へ嫁ぐのみとなつた。

歳火と赤社を分断する山脈の中に、「黄峰こほり」という峰がある。岩肌が険しく、非常に足場の悪い山道が続くことで知られていて、赤社の方角から歳火へ渡るものは、よほどのことが無い限り通ることはない道筋だ。

その山道に、百人もの煌びやかな一団で形成された大行列が見られたのは、あとにも先にもこの時だけかもしれない。

行列の中心、ひときわ目立つ大きな輿には、赤社国の王族の証である穂の紋が刻まれている。

そして、輿に張り巡らされた薄絹の中に、居心地悪そうに収まっているのは、輿入れの最中である赤社の一の姫だった。

「すごく仰々しい花嫁行列ですなあ、いくら可愛い娘の輿入れとはいえ、それほど財力のない赤社ではさぞ大変だったでしょうに……」

黄峰より一回り大きい峰「炎峰えんほう」の山頂で声を上げたのは、赤い衣を纏った集団の一人だった。

まだ幼さも感じられる線の細い金髪の若者が、遠眼鏡えんがんきょうと呼ばれる真鍮の長い筒を片目で覗いていた。

「ずいぶんと情容赦のないことを言うじゃねえか、お前も。国王の隣に収まるうってんだから、いかな貧乏な国の姫さんだとてそれなりに碌をつけてやらなきゃ、赤社の名が廃るってもんだらう」

そのいなすような声に若者が振り返ると、そこには頬に十字の傷を刻んだ精悍な青年が立っていた。

龍がとぐるを巻く派手な陣羽織を身につけ、露出した浅黒い肩や腕は漲る筋肉で覆われている。長い黒髪の間から見える瞳は赤く、親しげなようで鋭い。高い鼻梁の下の薄い唇は、乾いてかさついていた。

全体的に荒々しいが、どこか不思議と品の良さが感じられる青年で

ある。

「ええ、ですが、たとえ碌がなくとも宝玉のような姫ですよ。赤社一だと謳われた美しさは、噂だけじゃなかったらしい。これは当たり前でしたね」

「へえ、お前がそれほどに褒めそやすたあな。どれ、俺にも眼福を拝ませろよ」

「ええ」

若者は持っていた遠眼鏡を青年に渡すと、軽く下がって場所を譲った。

「いやあ、玉のように愛らしい……」などと若者が語っているのを聞き流しながら、青年は赤い瞳に視神経を集中させ、筒の中の小さな視界に望みの人物を探す。

だが探すまでもなく、その人物はすぐに目に入ってきた。輿を覆う薄絹が邪魔だったが、その中にいる一人の少女はよく見るとれた。

若者が言った通り、輝くばかりの美女だ。

白い肌の上に行儀よく揃っている目鼻立ち、紅を水でぼかしたような淡い唇、座しているため判然としないながらすっと伸びた背筋から均整の取れているだろう肢体が予想される。

「確かに、迫力の美人だ。文句のつけようがねえ」

「文句をつけるおつもりだったの？」

「美人で売り込んでおいて、いざ対面となったら十人並みが来る、なんてのはざらにあるだろう。性急にことを進めちまった身としてはそれなりに構えてたのよ。まあ、文句をつけるにも色んなやり方があるから、どっちに転んでもうまい汁は吸えるようにしていたがな」

「それはそれは、用心深いことで、よろしゅうございますな」

「まあ、どうせなら食いでのある方を選びたいからな」

そんな、いささか不躰な会話を交わしながらも、青年は舐めるように少女を観察していた。

その瞳に情欲の色は浮かぶものの、明るい光は映らない。

少女は、青年の好みとは少し違って、ふっくらとした頬の線と、意思の強そうな濃い眉をしていた。

その特徴を見た時、青年の中で、ぴんと閃くものがあつた。

「おい、光野^{こうの}。分かつたぞ」

光野と呼ばれた金髪の若者は、青年の少しうんざりとした声に首を捻った。

「いかなさいましたか？座龍様^{ざりゅうさま}」

それへ座龍と呼ばれた青年は真顔で、

「ありゃあ、まだ未通女^{みとおめ}だ。俺の趣味じゃねえな」

と語って見せた。

その時、その場にいた者全員が心の中では「っ」と長いため息をついたことに、知らぬのは座龍だけである。

「何を贅沢なケチをつけているんです。輿入れの姫が清らかなことは、僥倖とお喜びください。座龍様が普段相手にしておられる遊女小屋の端女とはわけが違うのですよ」

光野が眉間に人差し指を当てて釘を刺したが、座龍にはちっとも効いていなかった。

「俺はその端女の方が楽しみがあつていいがなあ。ガキじゃなんにも出来ねえ」

「まったく、それがついさっき私を情容赦のないなどとたしなめた人の言葉とは…」

「まあ、ガキなら育てりやいい話か。こうなつた以上、お姫さんは帰すわけにいかなくなった。大事な人質だ、もちろん丁寧に扱うさ」「ぜひとも、そうなさってください」

こちらもうんざりした様子で光野が掛け合つと、遠眼鏡に熱中している座龍の横に、音もなく影が忍び寄つた。

「陽炎か」
かけろう

「御意。ただいま戻りましたでございます」

別段その登場に驚くでもなく、座龍は陽炎と呼ばれた青年に視線を移した。

陽炎は、赤を基調とした衣を纏う集団の中にあつて、一人だけ生成り色の地味な格好の痩せた男だった。そのせいもあつてか、雰囲気静かすぎて空気に混じりそうなほど存在感が希薄だ。

「で、どうだった」

鷹揚に声をかけた座龍の前に膝をついた陽炎は、淡々と必要最小限に述べる。

「は、周囲に怪しい影もなく、これといった動きは見られません。

また、赤社の方においても、特筆すべき点は見当たりませんでした」「そうか。わざわざ急を要させて道を迂回させた甲斐があつたな。

赤社に関しては予想通りだが、しかし、羨ましいほど平和ボケした

国だな」

「このまま、赤社の列に加わりましょうか」

「お前なら造作もないだろうが、まずはいいさ。想像すると面白い
図だな」

存在感の希薄さも手伝って、陽炎が花嫁行列に混じるのは容易なことではあったが、それにしてもあの天人の祭列のように艶やかな列にあっては、逆に目立ちそうですらあった。

「しかし、座龍様、賊どもがどこに潜んだのかは、まだ詳細に分かっておりませぬ。このまま捨て置いてよろしいので？」

光野が懸念を正直に話しても、座龍は埒もないとでもいう風に首を振って笑い飛ばす。

「まあな、どこにいるかは分からねえが、少なくとも黄峰と炎峰で悪さを働こうなんて輩はいねえだろうよ。ここは竜神に守られてる。あとは、あの風にも耐えなそうな奴らの胆力に頼むしかない」

座龍は持っていた遠眼鏡を光野に託すと、陣羽織を翻して踵を返した。

その横顔には、不敵な笑みが浮かんでいた。

「それにどう転ぼうが、あの姫さんが俺の正室になることは、もう覆らない。姫さんに刃を向けたとあれば、それはことごとく俺へ刃を向けたことと同義になる。それこそ、情け容赦なく、な」

それが分かって馬鹿を起こす奴はいるまいよ、と言って、座龍はその場を後にした。

この男こそ、歳火国第二十一代王・座龍その人であり、赤社国の一の姫、示詩の嫁ぐ相手となる男である。

齡二十七となる男が、晩婚ともいえる形で正室を娶ったのにはワケがあるのだが、それはまだ語られぬ話。

終始見栄えの良い駒としか見なさなかつた姫を、この時、歳火国の誰も、王でさえ人間として捉えていなかった。

極めて政治的、かつ自己本位な理由で己が大国へ嫁がされたことも、また、示詩にはあずかり知らぬことであつた。

まだ誰も、この波乱の幕開けの顛末を予期せぬ今、時局はゆっくりと動き始める。

やがて、座龍という青年と示詩という少女に訪れる霹靂も、この時は地中深くになりを潜めていた。

第一章 わがまま姫と浮薄な武王・了

其の一

「想像を絶しますわ…」

なめした皮が張り巡らされた天幕の中で、絢爛な衣装を身にまとった天女の如き少女が、低い声で呟いた。

彼女は、今日、花嫁として西の大国歳火に嫁ぐ予定の赤社の姫・示詩である。

実におめでたい日であるはずが、彼女の表情は今、見事なまでに曇っていた。

それというのも、全てこれまでの道行に起因している。

「なんたる屈辱…なんという侮辱なのでしょう！」

示詩は腸の煮えくり返る思いで、これまでの顛末を振り返る。

事の起こりは、赤社を出立した間もなくのことであった。

首都である丹郷にじょうを後にし、間もなく国境へ続く街道へ入ろうかという時、一匹の騎竜が花嫁行列に近づいた。

竜は、ごつごつとした岩肌のような鱗の、苔のような色をした竜である。とがった鼻づらから口にかけて手綱がかけられており、騎手が乗る背中の部分には、見事な織の緋色の布がかけてある。その房飾りには色とりどりの宝玉がついており、乗り手の衣装同様に派手しく煌びやかだった。手綱の他には、騎手の為の器具は一切ついてはおらず、いかにも乗りこなすのが容易ではない様子だ。

そう、いかにも竜は、歳火特有の移動手段であり、主に戦場でのみ使用される騎獣である。

もちろん、そんな生き物を目にしたこともない赤社の兵士たちはみな一様に動揺し、騒ぎ立てた。

竜に跨った兵士がすぐさま歳火の使者の証を示さずにいたなら、場はいつまでも騒然としたまま、収まりがつかないところだっただろう。

しかし、一体どうして、戦場用の騎竜まで持ち出して使いをよこしたのか。

誰もが固唾を飲んで歳火の兵士の言葉を見守っていたが、その兵士の口からこぼれたのは、思いもかけないことだった。

「主要の街道ではなく、黄峰を通る山道から夕英山脈を越えてまかり来るべし」。

夕英山脈とは、歳火と赤社を分断している大山脈のことであり、黄峰とは、その山脈で二番目の標高を誇る峰である。

かつて、三代まで下った王の時代では、両社の国を行き来するのに重宝されていた道ではあるが、それも今は昔のこと。

現在主要となっているのは、これから向かおうとしている快適な街道であり、早馬であれば十日もかからずに歳火へたどり着く道筋だ。それを、早馬であれ人の足であれ倍はかかる山道を行けとは、いかにも無理難題なことであった。

だが、猛烈に反対する示詩とは裏腹に、今回の道行に参列した家臣たちは唯々諾々とこれに従ってしまった。

恐らく、国王である律草から素直に従えとも言い含められてきたのであろう。

たいして理由を聞くこともなく了承してしまった一行は、すぐさま進路を変更し、黄峰を目指して足を速めた。

しかし、予想通りとでも言おうか、道行は相当に困難だった。

示詩に言わせれば、これほどに足場の悪い道が本当に人の通る道なのかというほどの酷い道のみであった。

一時は、示詩が輿から下りて、己の足で通らなければならぬ箇所もあつたほどだ。

まず常識ではあり得ないことではあるが、示詩はなんとか理性を総動員させてその場を乗り切つた。

黄峰は、その岩肌が黄金に輝くことで有名な峰であつたが、一行はそついつた風情を楽しむ暇もなく、這う這うの体でなんとか山道を下りきつた。

「そつして、苦勞した末に招かれたのが、このようなあばら家……いえ、家ですらないのですものね、粗末な天幕に過ぎないのでしたわ」

赤社の一行は予定の十日を大幅に過ぎた、およそ二十二日後に歳火の国境に到着した。

そこで、またしても騎竜に乗り付けた兵によつて歳火国首都・郡雷ぐんらいとは別の道程へ向かわされ、たどり着いたのが鬱蒼とした林の中の天幕群だつた。

侍女が護衛隊長から聞いた話によれば、この辺りは歳火の神事の際に使われる緋翔林ひしょうりんではないかとのこと。

緋翔林といえば、邪九馬を中心として世界に広まつた竜神教の始まりの地とも言われている、有名な場所である。

婚儀に際する何らかの儀式を行うためだとしたら納得せざるを得ないが、それにしても、一言あつて然るべきはずが、またしても何の説明もなく性急に、一方的に事を押し進められてしまった。

これで腹を立てなければ、ただの愚昧なうつけ者だ。

示詩は、まさに、その愚昧なうつけ者にされようとしているのだつた。

「ひ、姫様っ」

示詩の耳元で、侍女の縫自ぬいじが裏返った声で叫んだ。
この天幕に着いて早々に示詩の身の回りの支度にかかりきりだった縫自は、ここであろうやく一息をつき、周りを見る余裕が生まれたらしかった。

「何事です、騒々しい」

耳に手を当てながら、示詩が眉を詰めて顔を向けると、縫自は腰を抜かして天幕の淵の方へ後ずさっていた。

「ひ、ひ、ひ、姫様、そ、そ、そ、そこに、なにか…」
「なにかとは…」

示詩は縫自が蒼白になって目をむいている方向へ視線を巡らせると、やや体を強張らせながらその名を口にした。

「この、竜を言っているのかしら？」

示詩が顔を向けた先には、こちらに案内した使者が乗っていた騎竜より、一回り大きな竜が蹲っていた。

こちらにも騎竜ではあるのか、鼻づらから口に掛った手綱が掛けてあったが、先ほどの竜が見劣りするほどの装飾品が飾り付けてあった。外に繋いでいないところを見ると、恐らく儀式の為に用意されたのではと検討をつけた示詩である。

「っひ、姫様、恐ろしくはないのですか！こ、このような化け物、私、私…」

今にも泡を吹いて昇天しそうな侍女の様子に呆れかえりながら、示

詩は声を強めた。

「その様に、はしたない態度を見せるのではありません！いいこと、竜というのは、歳火においては戦術の要ともなっており、他国でも知らぬ者なき有名な騎獣ですよ！それを、そなたらは揃いも揃って慌てふためき、果ては竜の迫力に恐れを成して、蛮族、歳火にまんまと言いくるめられ下手に出る始末。赤社の国民として、胸を張りなさいというのです」

「そんな、あまりにも殺生なお言葉…私、このような度重なる苦行、もう耐えきれません！」

すると、縫自は胸元から取り出した布巾で顔を覆うと、わああつと泣きだしてしまった。

その様子に、示詩は思わず心の底から掬い上げた重いため息を、はああつと吐き出すしかない。

分かっていたことではあるが、示詩は、赤社の者のあまりの頼りなさに、ほとほと呆れ返ってしまっていた。

嫁入りの前から、いかな箱入りの示詩であれ、ある程度の「苦行」は予想していた。

邪九馬を宗主国とした四竜連合国である歳火、業碧、灰露、濡羽、赤社の中で、最も国力が弱いのが赤社国である。それでも邪九馬の従属国でも交戦国でもない、中立的な立場を保っていられたのは、土地柄が良く農耕が盛んなうえ、若干ながら文化力が強いからだ。歌や舞踊、絵画に織物など、芸術面に関して赤社は一目置かれる立場にあり、神事では邪九馬へ赴きそれらを捧げることもあるため、一国としての面目を立てることが出来ていた。

しかし、その文化力ですら、最近是他国に追い抜かれつつあった。それでお他国から侵略されずにいる理由は、もはや地形の理による幸運でしかない。

赤社は周りを標高高い山脈で囲まれているため、容易には攻めにく

く、要衝が少ないので補填もしにくい。そうした理由から、他国から放っておかれている、というのが現状なのである。

そうした小国の赤社の姫が、大国と呼ばれる西の歳火に嫁ぐということは、暗に大いに舐められても仕方がない、ということの意味する。

あらゆる点で歳火が不手際を平気で晒してくるのには、「お前のような小国に払う礼儀は持ってない」といった非常に居丈高な意向が含まれてのことだ。

それら全て、歳火が、赤社にどういった立場かを分からせるために用意した意趣だったのではと、聡い示詩は勘ぐり始めていた。それだというのに…。

「一体、いつまでそうやって泣いているつもりなのです。由緒ある赤社の者が、恥ずかしくありませんの？歳火などに隙を見せては国の恥、ひいては私の恥となるのですよ。侍女として、少しは自覚をお持ちなさい」

うんざりした示詩がとうとうそんな言葉を口にするると、縫自は突然ぴたっと泣くのをやめ、

「あまりにもひどいお言葉！姫様、御前を失礼いたします！このような恐ろしき所、薄情な姫様とは一刻と居られませぬ」

と、物凄い形相で言いきって、足をもつれさせながら天幕を出て行った。

侍女としてあまりにお粗末な有様ではあったが、ただでさえ疲労が頂点に達しようとしている最中、横でめそめそと泣かれては更なる疲れが溜まりそうだったので、示詩は何も言わなかった。

元々、それほど親しみのある侍女ではない。

「私とて、このようなところ、好きこのんで座しているはずがないのだけれど」

そんな独り言も、誰もいない天幕の中では虚しく響くだけだ。

示詩は、仕方なしに天幕の様子をじっくりと見ることにした。

このまま、どのように料理されるにしろ、何かしらの脱却方法は見つけておいた方がいいと考えたのだ。

この辺りの考えが、示詩がいまいち可憐な姫になりきれない所以だ。見渡せば、天幕は太い二本の木を支柱に中心とし、円形に骨組みが組まれている。

天井の高さは背丈のある男性が一人余裕で立てるほどで、広さは、示詩のいる天幕においては、十人以上は入ろうかという程度だ。

骨組みにかぶせられた布地はこげ茶のなめした皮で、独特の臭気が鼻を突く。

入口から入って右の位置に座らされている示詩の目線の先には、暗がりで瞳を閉じて蹲る大きな竜がいて、入口から正面に当たる天幕の奥には、祭壇らしきものが組まれていた。

やはり、ここで何かの儀式が行われるのは間違いない。

そう確信するものの、では一体何の儀式なのかということとは、意識的に避けたい示詩であった。

よもや…。よもや、婚儀の祭礼ではあるまい。

心によぎった懸念が、段々と大きくなっていくのを、示詩は無視しようとして出来なかった。

そうだとしたら、一体どれほど野蛮な相手が現れるのである
うか…

示詩の脳裏には、自然と熊のようなずんぐりとした大男が浮かんだ。

そして、一瞬ぶると身を震わすと、急いで頭を振ってその想像を振り払った。

冗談ではない、「見目好く」の部分が抜けているなど、約束違いも甚だしい！

父である律草に八つ当たりのような怒りを燃やしている時だった。

「いやあ、お待たせいたしました、赤社国の姫様。：いや、我が国の王妃よ」

今しがた振り払ったばかりの想像の、熊のごとき大男が、天幕の入口に姿を現した。

其の二

其の二

「いやあ、それにしても、神々しいほどのお美しさですなあ。いや、お噂はもちろんこちらの歳火にまで轟いておりますぞ、『天女の如き』であるとか、『花も恥じらう』だとか、いや、噂もたまには信じてみるものですなあ」

そういつて、熊のようにむくつけき男はがははっと大きな口を開けて笑った。

示詩は唾が飛んでくるのを避けてさつと小袖で顔を覆ったが、相手はそれを恥ずかしがっていると取ったのが、「なんと可憐な…」とさらに感じ入っていた。

「いったい、この男は何者ですの…!？」

示詩は胃がずんと重くなるのを感じながら、下手に座った男を小袖から覗いた。

ぼさぼさの黒髪に少し腹の出ているたるんだ肉体、おまけに少し年季の入った皺が目立つ顔は半分が濃い髭で覆われていた。

唯一その男に親しみを感じるとしたら、意外とくりくりとした可愛い目元であったが、示詩には無駄な長所だとは感じられなかった。服装は、歳火の伝統衣装をしっかりと着こなしており、身なりに關してはきちんとしている様子だったが、それにしてもここまで図々しい態度をとられると学がない者のようにも思われた。

下手に座してはいるものの、よもや…。

示詩は最悪の想像を打ち立てていた。

よもや、これが歳火国王？

まじまじと熊男を見ている間にも、相手は慣れ慣れしく話しかけ続けているのだが、その厚顔無恥ともいえる大胆さが、いつしか示詩にそんな思いを抱かせていた。

いえ、落ちつくのよ、示詩。歳火国王は、確か今年で御年二十七。この者は、どう見ても四十は過ぎていきますわ。話のつじつまが合わないはず…

示詩は、なにも律草の話を額面通りに受け取ってこのように判断したわけではなかった。

離宮にいる時分、下々の者たちに話を聞いて歳火国王の人となりをそれなりに調べていたのである。

特に行商人の話は念入りに頭に入れた。

その行商人達の話でも、歳火国王が「熊の如き男」「年配の小太りの男」「醜男」だという言葉は一つも出てこなかったはずである。

出てくる単語といえば、「生来の武人」「西の武王」「英雄王」「燎原の火の如き王」といった、どれも武勇を讃えるようなものばかりだった。

しかし、そこで示詩ははたと気がついた。

皆揃って武勇は称えてはいたが、そういえば、外見に関しては誰も言及してはいなかった。

示詩はさつと顔を青くさせ、小袖を外すと、真正面から熊男を見据えた。

少し威厳には欠けるものの、身なりは小綺麗だし、服だって上等な布をたっぷり使った高価なものであったし、何より、小国とはい

え王族の一員である示詩に、これほど気安い口の聞き様。

まさか、この者が国王…！？私の夫…！？いえ、けれども…

示詩は、その予想を何度も打ち消しては頭に巡らせた。

必死にかき消そうとするのだが、熊男の遠慮のない笑顔を見ているうちに、どんとその予想は膨らんでいく。

更には、この天幕が今後己の住む場所で、一生狭苦しい思いをしなから、この熊の如き男につき従っていくしかないのだ、という妄想にまで至った。

自覚はないものの、この時の示詩は、長旅の疲れと緊張が溜まって、相当に冷静さを欠いていた。

それだからであろうか。

下手に座った熊男が立ち上がり、示詩の方へ近づいてきたことに、示詩は過敏に反応してしまった。

ちなみに、この時熊男がしゃべっていた言葉は、一つも彼女の耳に入ってきてはいない。

「それでは姫様、これから用意をば…」

「ひっ………」

示詩は、どうしたことがこちらに手を伸ばしてきた熊男の手から逃れようとして、思いつきり床を蹴って飛び退った。

「いやああっ、私は、私はあなたの好きにされるわけには参りませんわー!!」

なんといつても、示詩の理想とするところは「見目好く優しく逞しい殿方」なのであった。

その一項目に持ってきてきている当たり一番重要視している「見目好く」

が抜けている男には、例え離縁を想定しているとはいえ、一時も側にいてほしくはない。

示詩は、頑としてそれだけは譲れなかった。

「ああつ、姫様、そちらに行かれてはなりませんぞー！そちらには

…」

「私は、私は誰にも好きな様にはさせません！」

「っっっ！」

喚きながら熊男の制止を振り払った示詩は、自分が何か硬い物にぶつかったことに気づいた。

…「っっっ？」

壁ではない、かといって、岩でもない。

適度にごつごつしており、適度に弾力性がある、妙に温かい「モノ」

…。

示詩は青ざめさせていた顔色を、今度は真っ白に変化させた。

察したくはないが、勘のいい示詩はそれが何であるかに気づいてしまったのだ。

「い、いかん、姫様、はようお逃げ下されええ！！」

熊男の大音声が遠くで響いているかのようだった。

示詩は、らんらんとした目をこちらに向け、今まさに飛びかからんとしている大きな獣を目の前にしていた。

竜は、竜を扱い慣れている者以外が、みだりに触れてはならない。

大変気難しい竜などは、扱い次第でたちまち人間に死をもたらずである。

頭に叩き込んできた「歳火国見聞録」の竜の章のくだりがふつと頭に浮かんだものの、今となつては全てが遅かった。

全身が瘡のように震え、足も手も、まったく言うことをきかないのだ。

怖くて、どこもかしこも固まってしまっている。私は、こんなところで命を落としてしまうというの？

色とりどりの宝玉や布で飾られた竜が、その三本槍の刃のように鋭い爪が、振り下ろされようとうしている。

逃げなければ、頭では分かっているのに、体はびくとも動かない。まさに絶対絶命。

しかし、あの熊男に嫁がされるくらいならここで息絶えても構わないかもしれないと、珍しく気弱な考えが頭をかすった時だった。

「天轟！！」

澁刺とした力強い声が、天幕を突き抜けようかというほどに響き渡った。

それと同時に、薄暗い天幕に一陣の風と一筋の光が入り込み、瞬間に示詩を覆った。

そして、いつの間にか示詩は天幕の外へ突き飛ばされていた。

それは容赦のない、有無を言わさぬ力の塊が襲ったような衝撃だった。

「きゃああああー！！」

無意識に示詩は叫んでいたが、恐慌状態は直ぐに去った。

周りに、外に控えていた赤社の兵や侍女たちが駆け付けた為だ。

「姫様!!!」「示詩様、ご無事でしょうか!!!」「おのれ、歳火国、これはどういうことか!」と口ぐちに言っているものの、皆その顔は青ざめていて、虚勢だということがもろ分かりである。

示詩はそれを見て、一気に現実へ戻らされたような心地がした。

「返答如何によつては、これ以上の無礼は我が国への不敬と取りま
するぞ!!!」

護衛隊長がそんな間抜けな口上を述べ、相對した歳火の兵士たちと見かけは一触即発という緊迫な雰囲気になったかと思われた。

しかし、たった今示詩が投げ出されてきた天幕から一人の男が現れると、その雰囲気はまったく別のものへと色を変えた。

「あいすまなんだ、赤社の皆々様。何しろ事が急だけに、こちらも対応しかねた次第にて、重ねて非礼をお詫び申し上げます」

そう言つて、中から出てきた男は素早く一礼した。

長い黒髪が乱れもつれて背中に垂れ、赤い布の見事な衣服も若干泥を被つてはいるものの、その男の気品は相当なものだった。

醸し出される並々ならぬ迫力に、その場にいた一同はたちまち気圧されてしまつていた。

「貴殿が、赤社国の一の姫、示詩殿であろつか?」

「え…ええ」

切れ長の赤い瞳が、示詩の姿を捉えた。

その瞬間、示詩は己の心臓が強く脈を打ったことに気づいた。

「これは、名乗りもせず失礼致した。私が貴殿の夫となる男、座龍と申す者。以後、お見知りおきを」

「ざ…座龍様…」

示詩は、まったくそんな風に呆けて隙を見せるつもりがなかったのが、夫になるという「本物の」歳火国王を目にした途端、すべて忘れて魅入ってしまった。

やや荒削りで武骨な印象はあるものの、目の前にやってきた男は、大変に美しかったのだ。

それも、熊のごとくむくつけき男を目にした後だからか、非常に目が洗われるような思いまでした。

決して繊細な美しさではなく、むしろ全身から男臭さが漂う武人そのものの筋肉質な体つきだ。だが、それすら座龍を見目好く見せる要素であるかのように、彼は武人としての美しさを余すことなく持ち合わせた男だった。

示詩は、そういった男を目にするのは初めてのことだった。

「怪我はありませぬか？先ほどは火急のことながら、か弱きおなごの身を手荒に扱ってしまい、あいすまなんだ。この通り、お許しいただきたい」

歳火国王である座龍は、これまでの赤社に対する居丈高な趣向の数々からは考えられないほどに殊勝で、非常に礼儀正しかった。

かといって必要以上に謙っているわけでもなく、王としての威厳は損なわれていない。

示詩は、座龍が片膝をついてこちらの様子を伺っているのを、魂が抜けたようにぼーっと見ていた。

「示詩殿、いかがなされた？」

その、あまりの反応の鈍さに対して、さすがに座龍が、太い一文字の眉根を寄せて様子を伺った。

示詩は、上の空で「ええ」とか「はい…」といった返事を返してはいたが、周りで見ていた赤社の者たちはそんな示詩を見るのは初めてのことで、心配になって騒ぎ始めた。

「姫様、正気を戻されてください、姫様！」

護衛隊長が強く声をかけた所で、ようやく示詩は我に返る。

「そ、そのように大きい声で言われずとも、分かっております。私は大事ありません。皆、下がりなさい」

「しかし姫様、一体あの天幕で何があったのですか？ 私たちは歳火に中に決して立ち入るなと止めおかれた故、中のご様子が分かりませなんだ…」

護衛隊長の言葉に、示詩が軽く落胆を覚えながらも、掻い摘んで説明した。

「どうということもありません。あの中には大きな騎竜がおり、私が誤って襲われそうになった所を、歳火国王陛下にお助けいただいたのです。…陛下、遅ればせながら、命を御救いいただいたこと、心から感謝いたしますわ。誠にありがとうございます」

「そのように堅苦しい呼称は耳に慣れませぬゆえ、どうぞ気軽に座龍とお呼び下され、示詩殿。貴殿のように美しき女性ウツクシキメカドの命を救うなど、男として光栄の極み。感謝こそすれ、礼には及びませぬゆえ」

「まあ…、お上手ですこと」

「本当のことを言った次第にて、世辞などではござらん。美しさとは、示詩殿の為の言葉のようだ。輝くばかりのその美貌に、四竜の神々もよろめきましよう。まこと、私は幸せな男です」

「ま、まあ……」

これでもかというほどの褒め殺しに、示詩の方がよろめいてしまいそうだった。

座籠に調子を狂わされているのは、この教養の行き届いた言動にあると、示詩は推測していた。

そもそもが、示詩は歳火の国王を武力馬鹿で脳まで筋肉で出来ているような野蛮な男を想定していたので、こういった言葉を尽くした世辞が言えるような人物とは、万に一つも思っていなかったのである。

それが、こうして目の前に現れた実際の歳火国王は、話に聞くより、噂で知るより、よほど「見目好く優しく逞しい殿方」に近い、理想の男性像そのものだった。

示詩は、己の予想が外れたことで、内心ではかなり面喰っていた。刺し違えてでも寝首を搔いて王座を乗っ取ろうとしていたのに、その計画が崩れ去ってしまいそうな恐れを抱いた。

畢竟、それは示詩が歳火国王に惹かれたことを意味し、かつ自覚しているという事実を指している。

示詩は認めたくないながらも、一瞬で歳火国王・座籠に落ちてしまっていたのだった。

其の三

「では『天轟』…とは、この竜の名前だと？」

「さよう。この天轟こそ我が騎竜。歳火の二十一代目の『王竜』に選ばれし竜になる、示詩殿。どうか可愛がってやっていただきたい」

事の顛末を座龍から直々に教えられている最中、天幕の中にいた騎竜が座龍のものであるということが判明した。

示詩は、自身が何かの力によって天幕の外へ押し出された際、誰かが「てんごう」と叫ぶのを耳にしていた。

それが気にかかって座龍に尋ねたところ、それは座龍が己の騎竜の暴走を止める為に呼んだ名だということが分かり、更には示詩を押し出したのは座龍本人だったという事実も知らされた。

それにしても、誰かに投げ出されたというよりは、何かにぶつかったような衝撃のように感じられたのだが、その疑問を口にする前に座龍が天轟を天幕から引つ張り出してきた。

「……………」

示詩は精いっぱい理性をもってして悲鳴を飲みこんだ。

天轟は、やはり並々ならぬ迫力に満ちていた。

先ほど、その爪牙にかけられようとした時の恐怖が蘇り、示詩はぶるりと身を震わせたが、持ち前の気の強さでなんとかその場を離れずに済んだ。

「お、大きくて、とても強そうな騎竜ですわね。それに、聡明そうで…」

「これはお褒めにあずかり恐悦至極。これでいて、私が乗りこなすまでは暴れ竜として有名でしてな。騎竜となる竜はたいがいが炎峰を住処とするのが、この竜は街道まで出没しよく人を襲っていたので、退治されそうなところを、私が捕らえて騎竜としたのです」

「それは見事な…陛下はお強くていらっしやいますのね」

「いやいや、気が合った、という程度のこと。騎竜兵は皆、己の乗る竜をほとんど勘のようなもので選ぶゆえ、大したことではござらんよ」

そう座龍が謙遜すると、隣の天轟は不満そうに「ぎい」と鳴いた。まるで人間の言葉を解するかのように表情豊かな竜に一瞬親しみがわいた示詩であったが、初めてまともな目にする竜に、それ以上近づくことは叶わなかった。

何しろ、恐ろしい。

これまでなるべく見ないようにしていたのが、明るみに出て間近で見ると、恐ろしさとともに、竜という生き物の隅々までがすべて見て取れてしまう。

竜は、蜥蜴を大きくして二足歩行を可能にしたような体形で、首から腹にかけての影になっている白い部分以外は、すべて苔色の乾いた鱗で覆われていた。

足と手は二本ずつあり、どちらも頑強な筋肉で構成されてはいるが、短い。

指は三本で、爪はよく研いだ小刀のように鋭く光っている。

頑丈な顎の上の口からは伸びた牙が二本ずつはみ出ており、さらにその上に乗っている大きな目玉は、燃え盛る炎のように赤く、猛禽類独特の凶暴さが秘められた瞳だった。

ま、まともに見ていただけませんか…。このような生き物と、これから毎日顔をつき合わせていかねばならぬというのでしょうか…

目を反らし、そんなはずはないと頭では考える示詩だったが、実際、これほどに歳火に定着している竜の文化を目の当たりにしてしまうと、さほど楽観はできない気がしてきた。

「しかし、歳火国王。一体どうして、山道を通って遠回りをする必要があつたのでしょうか。我が姫は、とてもお辛い思いをなされてここまでたどり着いたというのに、さらにこのような場での歓待とは…」

座龍が示詩に詳しく説明を述べているのに便乗し、護衛隊長が口を挟んだ。

確かにそれは国にとって重大な事であつたが、聞き方が悪かつたのか、座龍は「それは後に陳謝と共に詳しく書状にしたためるゆえ、ここでの解答は遠慮させていただきたい」と素気無く断つた。

もう少し頭の回る物言いをしてほしいと思つた示詩だったが、もう何も言うまい、とこっそりため息をついて己の国の落ち度を嘆いた。そして、結局、示詩付きの侍女だつた縫自が不在のまま、天幕にて儀式が行われるとの説明が下された。

示詩にとつて認識したくなかつた事実であつたが、やはり婚儀は天幕内で行われるとのことだつた。

歳火では緋翔林で天幕を張り婚儀を執り行つ伝統があるらしく、その慣習は、遡れば歳火国の建国時にまで行き着くらしい。

示詩が参考とした「歳火国見聞録」にはそこまで詳しい記述がなかつたし、仕入れた情報も細部までには至らない物だつたので、それが真実かどうか示詩には判断できなかった。

しかし、いかな伝統的作法とはいえ、あまりに質素で地味な婚禮の儀に、示詩は納得のいかない気持ちで天幕に座していた。

(そうはいつても、もう嫁いでしまつてはこちらに従うしか術がないのですわ)

薄暗い天幕内をぼうつと照らす蠟燭の火を見ながら、示詩は目の前に座している己が夫を意識しないように気を張っていた。

「では御兩人、準備はよろしいですか？」

先ほどの熊男、名を燈源とうげんと名乗る男が、顔を皺皺にして笑いかけた。

「しからばこれより、神前にて、歳火国王座龍様、そして王妃とされる赤社国の一の姫、示詩様の婚礼の儀を執り行いましょう」

示詩が驚いたことにこの髭面のでっぷりとした男は、歳火国における最高神官なのだという。

「我が良き理解者であり、尊敬する叔父でもある」と座龍が紹介した通り、元々は王位継承権を持った先代王の弟だった。

そんな人物に対して、示詩は失態の限りを尽くしてしまった先ほどの自分に果てしなく後悔していた。

だが、言い訳が許されるのならば、彼はどう見ても神官には見えなかった。

せいぜいが、身分の高い豪族、といった印象だ。

下位の身分であれお高くとまった神官が多い赤社では、絶対に考えられないほどの気安さに、示詩もつい油断してしまったのだ。

事前の打ち合わせや、歳火からの書状にあった指示を覚えてきたこともあり、婚儀は無事滞りなく行われた。

だが、騎竜を使った獣狩りや、騎竜同士を戦わせるなどの野蛮な祭礼もあり、示詩はますますこの先の不安を思っ表情を暗くさせた。その間、唯一の救いだったのは、夫となる歳火国王座龍が、優しく噛み砕いた説明をしてくれたり、示詩をたっぷり褒めあげてくれたことだった。

国元では不遇な扱いや罵りを受けることも多かった示詩だが、外見にはかなりの自信を持っていたので、その頼みとするところが実りそうではっきりとしていた。

だが、ちくりと胸を指すしこりがあるのもまた事実だった。

これほど理想とする殿方を前にして、私は普段の私のままで望みを遂げられるのかしら。

己の目的は王位篡奪だったはず。

しかし、眩いばかりの座龍の笑顔が向けられるたび、体のどこか奥の方が熱くなり、なにも考えられなくなっていた。

私は、…私はこの方に心を奪われたとでも言いますの？私はこのようなことで恋情にひれ伏してしまうような人間だったのでしょうか…

座龍の、謎めいた深い赤の瞳に見つめられるたび、肌がぞわりと泡立つようだった。

それは心地よくもあるのだが、どこかに気を許せないような得体の知れなさも感じられた。

「示詩殿、あれに見えるは、我が城、緋竜城。貴殿の住処となる場所です」

「あれが歳火の…」

馬車の窓から見える、首都・郡雷の中心にそびえる塔。

それがかの有名な緋竜城だ。

噂通り、外壁は全て朱色の塗料で塗られており、遠目で見ると、まるで城全体が燃え盛っているかのようだ。

婚儀は長いようで短く終わり、丁度昼下がりから夕刻にかけての時

間で王都に到着した。

華麗というよりは嚴重といった作りの馬車に座龍と揃って乗り込み、乗り心地の微妙な座席で揺られること一刻半。てつきり国民へのお披露目もかねての同乗かと思いきや、馬車はむしろ人目のつかない裏通りのような所を通っていった。

歳火の王城へ通じる大通りは大変な賑わいで、いくつもの出店が並び、様々な国から来たもので溢れ返ると行商人に聞いていた示詩だった。

見るのを楽しみとしていた節もあって少し残念に思い、加えて、お披露目の行進も見せないとなると、歳火の意図を勘ぐるのも已むなし、むしろ当然の成り行きといえた。

何かがおかしい。

分かってはいても、歳火の王には隙というものが見つからず、何を聞いても上辺だけで、遠まわしにごまかされる始末だった。

最初こそ、座龍のあまりの男振りに浮わついていた示詩だったが、出会ってからの言動、所作、態度などから、少しずつ冷静さを取り戻し、疑いを抱き始めていた。

王城につくと、驚いたことに、赤社の伴の者たちは皆帰された。

これにはさすがの示詩もしおらしい美姫など演じてはおられず、強い調子で訴え出た。

「これはどうしたことですの！？陛下！！私は、誰からもこのような話、聞かされておりませんわ！」

座龍は表情だけはすまなそうに装って、懐から一通の書状を取り出した。

「それは、大変ご無礼をいたしました、示詩殿。しかし、困りましたなあ…私は、事前に貴殿の元へ、その旨をしたためた書状を送っておりました…して、このように返事も頂戴いたしましたゆえ、指示を出した次第にて」

示詩は、急いでひつたくりしたい気持ちを鎮めながら、姫らしい優雅さを保って書状を受け取った。

見れば、確かにそれは父である律草の筆跡であり、ご丁寧に押韻も添えられてあった。

はめられた！

律草は示詩の反抗を予想して、歳火側の主張を一部しか話していなかったのだ。

額面通りに信用してはいなかったものの、まさか伴の者を一人もつけられず輿入れするとは想像だにしていなかった。

寵愛を失ったとはいえ、仮にも血を分けた実の娘を、身売り同然のように他国へ送り出すとは…。

「ご理解いただけましたかな？」

したり顔の座龍に睨み返すことも出来ず、示詩は不本意な怒りを抱えたまま、無表情で書状を返した。

座龍は、受け取ったと同時に示詩の身柄を家臣へと引き渡し、そのまま奥の王城内へ一人歩み去った。

その間、示詩は城の説明や今後の予定などについて家臣から説明を受けていたが、何一つ頭には入っていなかった。

味方の一人もいないまま、どうやって王位転覆を図れるというのでしょうか。

問題はそこだった。

元々頼りになるかならないか分からない家臣とはいえ、間諜の真似ごとくらいは朝飯前に出来る者たちばかりだった。その上、赤社側、つまり国王自身に協力の姿勢がないとなれば、ますます動くことが困難となる。

もともと煙たがられ孤独に慣れている示詩ではあったが、今は真の意味で孤立無援と化してしまっていた。

「姫様、よろしいでしょうか。……姫様？」

「え……」

幾度か呼びかけられたところで、示詩はようやく気がついた。

何を話していたのかはまったく分からなかったが、後で詳しく聞くことを選択した。

もう、これ以上は睡眠もなしに何かを受け入れられるような余裕がなかったのだ。

「ええ、私はもう下がります。寝所はどちらになりますの」

分かっているのか分かっていないのか不安そうにしていた家臣は、突然しつかりとした口調で話し出した示詩の様子にほっと息をついていた。

「では、ご案内させていただきます。こちらへ」

王城内は、見た目の派手さとは裏腹に、ともかく質素だった。

ときどき漆喰を彩っている壁画は、自国の強さを表し、他国の者へ対する脅しの様な内容で、芸術性のかけらもなく、示詩を落胆させた。

石造りなのかと思いきや木造で、太い柱を支柱とし、中心が吹き抜けとなつて上の階まで続いていた。

寢所はその一番上の階のようだった。

城門から入って奥にある階段を五回登ると、吹き抜けではない広い部屋が用意されており、そこは下の階の地味な様子が嘘のように派手だった。

一言で言つと、悪趣味である。

「む、無理ですわ、私、このようなところで体を休められませんわ
！」

動揺がつい口をついて出た。

さもありません、その一室は、どこまでいっても黄一色。

壁も床も柱も、全てが黄色で塗られているのだ。それも、淡い色ではない。勢いのある火のような、朱に近い黄。緋色である。

窓や調度品は流石に別の色であったが、それにしても目立つことこの上ない。

炎の中に放り込まれたような錯覚にまで陥った。

「そ、即刻、別の部屋を用意してください、それでないなら……」

さらに言い募ろうと後ろを向くと、いつのまにか、案内をした家臣の姿が消えていた。

示詩は冷や汗を浮かばせて階下へ戻ろうとしたが、鋭い声がそれを制止した。

「どこにいかれるおつもりで？赤社の姫君」

よく通る明朗な声は、馬車の中までは夢見心地で聞いていたはずの声だった。

「座龍…国王陛下」

見れば、入って右側の奥にある扉から、先ほど姿を消した座龍が、先ほどよりは緩い格好で姿を見せた。

「そのように堅苦しい名称でお呼びなさるな、示詩殿。貴殿には麗しい声で名を呼んで…」

「私、このような部屋では体が休まりませんわ！どうぞ、今日だけは別の部屋を用意していただけませんでしょうか、陛下」

座龍の声を遮って、示詩は必死に訴えた。

それは、切実さを伴って悲鳴に近い声となり、広い部屋に響き渡った。

座龍は口元に薄い笑みを浮かべて、ふっと短く息をつくど、野卑な所作でどっかと長椅子に腰を下ろした。

「まったく、我がまま姫の噂だけは真じゃねえ方が助かったんだがなあ…」

背もたれに腕をかけて天を仰ぐ様子に、示詩は思わず目を見張った。

これは、誰！？

今まで目にしてきた座龍という人物とは別人のような男が、示詩の目の前で盃を手にとって酒を注ぎ始めた。

見るからに野蠻なその動作に、示詩は自分が何を目に見ているのか一瞬理解できなくなった。

「部屋を変えろといったって、ここが俺の部屋だ。そしてあんたは、

これから新床を迎える俺の花嫁ときてる。さすがに通る言い分じゃないと思わねえかい？」

「座龍：国王陛下……貴方はっ……!？」

その示詩の驚き様に溜飲を下げたのか、座龍ははっはっはっとな声で笑い出した。

「いや、悪い悪い。驚いたかい？あんたを騙すつもりはなかったんだ、あんたについてきた奴らの方は騙すつもりでいたがね。元々すぐ追っ払うつもりだったもんで、錆びついちまった教養つてのを引きずり出して、めいっばい化けの皮被らせてもらったわけだが……」

「……………」

「さすがに刺激が強すぎたかい、お姫さん？」

示詩の視界は、それっきり黒くなって途絶えた。

其の四

黒くなった視界が明るくなったことに気づき、示詩は瞳を動かした。瞼は閉じられていて、どうやら眠っていたようだということは分かったが、ではなぜ眠っていたかという答えは出てこない。

だが次の瞬間、示詩ははっとして目を覚まし、横になった体勢から起き上がった。

「気がついたかい」

声が聞こえた方を向くと、黒塗りの文机で何かを書いている座龍の姿があった。

机の脇に置かれた二つの灯籠によって仄明るく照らされた室内は、先ほど案内された黄色で埋め尽くされた部屋とは違うことを表している。

深い焦げ茶色の木造の壁は、示詩に、故郷である赤社の離宮、園恋宮を思い起こさせた。

「陛下…私は…」

座龍の落ちついた執務態度を見て、先ほどの野卑な様子は夢だったのかとほっと胸を撫でおろした示詩は、よほど己が疲れていたことを知った。

だが、こちらを見てにやりと笑ったその顔には、婚儀の席での優雅さのかけらもなく、示詩は撫でおろしたばかりの胸が一気に逆撫でされたのを味わい、顔を青ざめさせた。

「疲れてるところ、ごちゃごちゃと言っちゃまって悪かったな。この通り反省してるから許しちゃくんねえか」

じわり、と手に汗が滲む。

夢、などではない。

やはり歳火国王の本質は、この野蛮な口調と態度そのものだったのだ。

「陛下…」

その呼びかけに何も答えないまま、座龍はそつのない動作で大股で示詩の方へ歩み寄ってきた。

大柄な座龍は、今日始めて目にした竜ほどでないにしろ、たつぷりとした威厳と圧倒的な迫力に満ち満ちていた。おそらく、幾多の戦場をくぐり抜けてきたであろう経験と知識とが、この若い国王にそれらを与えたのだろう。

示詩はそんな座龍の威圧されるような雰囲気を感じながら、冷静に分析していた。

示詩は、今更になって、自分がとても抜け出せそうにはない虎穴に頭から突っ込んでしまったような感覚を覚えていた。

百戦錬磨とも言われる軍事国家の長を相手に国家転覆を企むとは、いかにも無理難題なことのように思われてきてしまう。

しかし、それでも示詩は身がすくむ己の弱さを叱咤しながら、ことの経緯についての釈明を求めた。

「私は、一体どうしたのでしょうか。ここはどこなのですか」

示詩の青ざめた顔を見下ろしながら、座龍はしゃがみこんで、寝台の上で身を起こす示詩の顔までぎりぎりに近寄って言った。

「あなたは、俺の話の最中にぶっ倒れちゃったのさ。だから俺が寝所に連れてきて寝かせた」

「国王陛下みずから？」

「誰も控えさせてなかったからな。ちなみに、最初にあんたと会った所は、あれは客間だ。それも各国のお大尽なんかを呼ぶ時のおき、な。あんたがあんまり強く寝所だと信じ込んで反応するもんだから、ついからかったんだよ」

「からかつ……」

示詩が絶句していると、座龍はさして悪びれもせず「すまん、すまん」と謝った。

「寝所に入る前に、あんたには話しておきたいことがあったんだ。確か寝所へ案内する前に、客間へ通すように伝えろと言っておいたはずなんだがな」

「あ……」

示詩はまたも犯した己の失態に齒がみする思いだった。

示詩が座龍の態度に絶句してる間、家臣の者から受けていた説明に、そのことが含まれていたことは明らかだった。

だが、ここでどれだけ悔やんでも過ぎてしまったなら仕方がない。それより、まだこれ以上胃の縮む話をさせられるのか、と身を構えたところ、座龍が安心させるように穏やかな笑みを見せたので、示詩はこちらから話を切り出すことにした。

「この私に、これ以上何を指望みになることがございますの？あなたは私を身一つにすることに成功し、そして赤社国に対しては十分にその力を見せつけることを成功させたではありませんか。…一体何を企んでおいでなのですか？」

「へえ……」

忌憚のないその疑問に、座龍は思わず目を見張らせた。

ただの高慢ちきで鼻持ちならないガキと思っていた小国の姫が、思いのほか色んなことに勘を働かせており、それがあながち間違ってもいなかったからだ。

座龍はご褒美を上げるかのように、頭を二回ほど撫でて答えた。

「俺が姫さんと赤社に何を望んでると、あんたは思っただ？」

「……私がここへ嫁したことが、人質という役目をもっているのは分かっておりましたわ。けれど、歳火国は私たちに對してそれ以外の要求を望みませんでした。代わりに軍事技術の提供、貿易規定緩和、こちらが涙を流して喜ぶような援助の数々を申し出た……私はこれを、体のいい脅しだと取りました」

「ふむ。こんだだけ条件をよくしてやったんだから、文句を言わずに言うことを聞け……ってな具合にかい？」

座龍の赤い瞳が、面白そうに光を宿した。

「ええ、そうですね。我が国がこちらの国勢に劣ることは火を見るよりも明らかなことではございますが、それでも対外的には四竜連合国の一員ですもの。赤社に敬意を払わねば歳火は対面を保てませんわ。ただでさえ軍事国家として名を馳せているところへ、礼儀も分からぬとなれば、他国へたちまち隙を見せることになることでしょう。そうならぬよう、かつ、私たちに脅しをかけるには、赤社を骨抜きにした方が話が早い、そういう思惑があったのではと考えましたの」

「……こりゃ驚いたな。その綺麗な形の頭は、ただの飾りじゃねえよっだ」

その眩きは、示詩の推測がほぼ正解で間違いないということを示唆していた。

だが、座龍の素直な驚きの声に、示詩はかっとなってその事実を見

過ぎました。

「私を愚弄しておりますの!?!」

「いや、褒めたつもりだったんだが、気を悪くしたなら謝ろう。すまねえ」

「……それで、私の質問には答えて下さらないのですか、陛下」

まるで暖簾に腕押しするように手ごたえのない座龍の態度に拍子抜けし、示詩は本題に戻ることにした。

このまま自分の調子を崩されてはまた言い様に丸めこまれてしまうと懸念したのだ。

そんな示詩の様子を面白そうに眺めながら、相変わらず座龍は近距離を保ったまま、探るような眼で己の妻となった少女に笑みをよこした。

「いや、そこまで分かっているんなら話は早そうだな。それなら姫さん、あんたは何が望みだ?」

「え?」

またも質問に質問で返されてしまった示詩は瞬時に怒りを沸騰させたものの、座龍がますますこちらへ寄って来るのでやや後ろに退いた。

今まで気づきもしなかった距離の近さが、この時になってようやく示詩に相応の緊張感をもたらしていた。

考えて見れば、私、このように近くで男性を見たのははじめてだったのだわ…

突然どきまぎとし始めた心臓を押さえるように胸に手をあてて、示詩は鼻先三寸の位置にいる座龍をただ見つめた。

だが、そんな示詩のときめきなど知る由もない座龍は、お構いなしにずばずばと本題に入り始める。

「この国の妃となる自覚はあるかい？」

「妃の役目は分かっているか？」

「この歳火の国風は、あんたなら分かっているよな」

「許せるか？」

心臓を高鳴らすのも忘れてあつけにとられた示詩を置きざりに、座龍は矢継ぎ早に質問を浴びせてきた。

知性など感じさせないその遠慮のなさに怒りを覚えたところへ、座龍はとどめとばかりに最後にこう問うた。

「それで、俺の隣に立つ自信は、あるんだろうな？」

示詩の怒りは、とうとう膨らんで弾けた。

「この私が、その程度の覚悟もなしに嫁いでまいると思いませんか？ 愚弄なさるのもいい加減になさいまし！！」

気持ちいいほどのその啖呵のきりっぷりに、座龍は笑って膝を打った。

「よし、言ったな！ そんだけの威勢がありゃこっちも安心して任せられるってもんだ」

「は？ 任せる、とは……」

にやり、と意味ありげな笑みを示詩に向けた座龍は、そのまま腰を上げると、寝所の入口まで行って扉を開けた。

重厚な鉄製の黒い扉がギョッとときしんだ音をたてて開かれる。

すると入口の向こうには、明りを手にして暗闇に浮かぶ小さな少年の姿があった。

薄暗い廊下でさえなお輝く朱金の短髪、そして、こちらを射ぬくほどの強さで見つめている若草色の瞳を見てみると、示詩にわずかな既視感を覚えさせた。

それは…

「息子の竜脊だ」

座龍をはじめて見た時と、良く似た感覚だった。

「今年で七歳になるが、中々手をつけられん悪餓鬼に育ちまっとな。少々てこずると思うが、よろしく頼みたい」

「う、ご息がいらっしやいましたの…!？」

どこの情報にもなかったそれは、初耳だった。

いや、この場合は寝耳に水といった方が正しいだろう。

「ああ、ちつとばかり込み入った事情があつて、他国には伏せてあつたんだが…正真正銘俺の子供だ」

示詩は、眩暈のする思いでそれを聞いていた。

子持ちの男の妃になるなど、どれほど位が高くて見目好く優しく逞しい殿方であれ、嫌だ。

それも、「いたらない息子だが、よろしく頼む、母上」などと、にこりともせずに挨拶するかわいげのない子供の母親など、絶対にないたくない。

なれるはずがありませんわ！

倒れずに済んだのは、二度と失態を見せたくはないという意地の成せる業でしかなかった。

それがなければ、示詩はすぐにでも卒倒していただろうと思われた。怒りも、頂点を極めると悲しみと近しい感情になるものか、と示詩は思った。

(初夜も迎えぬまま…子持ち…。この私が…嫁いですぐに他人の…
……母親ですって?)

冗談じゃない!

「ご、ご、御冗談も、ほどほどにしていたただかなくては困ります! 私は、確かに陛下の隣に立つ覚悟はありますが、この口ではつきりと申し上げましたが、それが他人の子を育てることと同義とは、夢にも思っておりませんでしたわ! 失礼ながら、ご了承いたしかねます!」

あんな、引っかけの様な手口で言質を取ったつもりでいるのなら大間違いだ、と示詩は鼻息も荒く主張したが、相手はなんの痛みも感じてはいないようで、涼しい顔でこう言ってきた。

「そんなら、さっきのあなたの覚悟ってというのは、撤回するってことだな?」

「なっ…!」

したり顔でいう座龍は、まるで示詩の反応を予想していたかのように苦も無く弱点をついてきた。

示詩は、自分の決断を曲げるのが、ことのほか苦手なのだ。

「自信たっぷり、あんなに強く啖呵を切ったってえのに、それももう翻すのかい。……案外に、根性がねえお姫さんだったんだな」

「うっ…！」

「残念ですよ、示詩殿」

座龍は、嫌みたらしく、出会った当初の慇懃さで、示詩の心を揺さぶるセリフを投げつけてきた。

ここで「やはり…」と意見を翻しては、座龍の思うつぼだ。

だが、自分の意地を張りとおしたところで、もはや己の希望に沿う道は用意されていないことに、示詩は気が付いてしまっていた。

示詩の脳裏には、一歩、また一歩と自分から遠ざかっていく王位篡奪計画の図が、ありありと浮かぶようだった。

国王ですら御するのが至難の業でありそうなのに、その上息子がいては、もはや己の望みは、計画倒れとなりそうな状況を示していた。

已む無し、か。

どの道嫁いできてしまった手前、朱に交わるほか仕様が無いのだ。

その上、言質もとられている。

示詩は渋々、とても苦り切った顔で、挨拶をするため軽く身支度を整えた。

「よ…よろしく、お願い申しあげますわ、陛下、…竜脊様」

よろよると寝台から立ち上がると、一礼し、齒噛みながらそう口にする。

竜脊はそれを受けて、生意気そうな大きい釣り目を、つつと動かしたただけだった。

こんな子供には絶対によろしくなどしたくはなかったが、示詩はつい先ほど、言ってしまったのである。

この私が、その程度の覚悟もなしに嫁いでまいると思いまし

て！？愚弄なさるのもいい加減になさいまし！！

座龍の、おそらくは「母親になる覚悟はあるか」といった意味を含んでいたのである。質問の数々に対して、「あるに決まってるだろう」というような返答をしまつていたのだ。

それが例え、卑怯極まりない畏のようなものだったとしても、示詩はそれに気付かず、了承してしまつた。

気位の高い示詩から「やっぱり無理です」なんていう言葉が出るはずもなく、結果として、示詩はまんまと歳火国王・座龍の術中にはまつてしまつたのである。

「おお、了承してくれたか！そうこなくっちゃあな」

「……私に、その役割を負わせるためにこの婚儀を企てたのでございましょう」

示詩のたつぷりの皮肉を、座龍は笑つていなした。

「すまねえな。こいつには生まれた時から母親がいないもんで、侍女頭や侍女たちに任せておいたんだが、なにしろ言うことをきかねえもんで、格別わがまま放題になつちまつた。それで、手を焼いた周りのモンから正室を娶れつて毎日のようにせつつかれて、うんざりしたところに、家臣からあんたのことを聞かされた。赤社の姫さんなら、教養も身分も申し分ねえ、おまけに連合国一の美貌つてのを聞いて、二つ返事で決めちまつたのよ。……しかし、これほど度胸の据わつた姫さんとまでは聞かされちゃいなかったからな、運がよかつたつてなもんさ」

ご機嫌な様子で語りかけてくる座龍とは裏腹に、示詩はどんどんと自分の気持ち沈んでいくのを味わつていた。

つまりは、手に余る子供のしつけ係を探していたところ、隣国に売

れ残った姫がいて丁度良かった、と。

示詩には、座龍の言葉はそう翻訳されて聞こえてきた。ぴくぴくと柳眉が跳ね上がるのを自覚しながら、示詩は我慢ならずにこう言った。

「それでは陛下、私たちを必要以上に威嚇したあれは、なんだったのでしょうか。黄峰などという格別足場の悪い道を使わせてわざわざ遠回りをさせたり、騎竜兵を使って急に目的地を変更させたり、伴の者を一人残らず国へ返したり…私を竜脊様の為に召喚させるためとはいえ、それほど趣向を用意なされたのは、他に思惑があったためではございませんの!？」

悲鳴のような示詩の問いかけに対し、座龍はあっけらかんとこれに応えた。

「そりゃあ、さっき姫さんが言った言葉の通りだ。ようは、こっちが上だつてことを十分に分からせる必要があったんだ。そうじゃねえなら、大した見返りもなしにこっちの貢ぎモンをくれてやるわけにはいかなかったからな。…ああ、だが、黄峰を使って遠回りさせたのは、それとは別だったな」

「なんですの!？」

せめてもう少しまでも大きな理由が欲しいと、示詩は優雅さも意識せずに息巻いた。

そうでなければ、あまりに自分が惨めに思えたからだ。

「ここが、しょっちゅう戦をしてんのは知ってるだろう。特別警戒地域もコロツコロ変わるのがこの歳火つて国だ。お姫さんが街道に出るその日に、ちょうど賊がうるついで情報が入ってな。賊といつても、盗賊なのか、反乱を起こした奴らか、それとも敵国の

軍なのか、そんなときには何にも分かつちゃいなかった。あんたらに事情を言わなかったのも、もしかしたらその賊の間者が紛れ込んでるかもしれねえと警戒したためだ。だから、ちと辛いとは思ったが、街道を通るよりは、ひとけのねえ山道を通らせた方が安全だと判断して、あんまり日もねえから騎竜をよこしたのさ」

それは、非の打ちどころのない、いたって正当性のある理由だった。だが、その事実を示詩を落胆させるばかりだった。

それでは、つまるところ、示詩は竜脊の世話をするためにあのよう
に辛い思いをして山道を通り、お世辞にも華麗とは言い難い婚儀を
我慢し、この野卑で遠慮のない国王の元へ嫁がされてきたというこ
とになる。

茫然としてみると、座龍は竜脊に

「さ、お前はもう寝る時間だ。部屋に戻んな」

「まだ眠くない」

「眠くなくても子供は眠らなくちゃならねーんだ。それが仕事だからな」

「父上、あの人が俺の母上か」

「そうさ。俺はこれから母上に用があるから、お前はもう戻れ。そうしたら、竜の卵を明日見せてやるっ」

「ほんと！？約束だぞ！！」

などといった、うまく言いくるめて自室に下がらせた。

その会話からも、示詩は男親の頼りなさというものを既に感じてしまっている。

いかな百戦錬磨の偉大なる王とはいえ、自分の息子には存分に甘くなってしまうようだった。

「そんじゃ、姫さん。行くとするか」

「突然、どこへ行くというのです」

目の前に大きな手のひらを差し出してきた座龍に対して、示詩はにべもなく言った。

この夫には、もはやかけらも親しみを抱けなかった。

「どこへ、とは野暮なこつたな。婚儀を挙げた夫婦がその晩やることといったら、一つしかねえだろう。ここはあなたの寝所だからな、俺の部屋へ行って、広々とした寝台で愛を交わし合おうじゃねえか……」

座龍がやに下がった顔でぬけぬけとそんなことを言ったので、示詩はとうとう堪忍袋の緒がきれた。

パシィッ！！

座龍に向けられた手の平を思いつきり払い落とすと、示詩はつりあがった目で喧々囂々と言い放った。

「おことわり、申し上げますわ！国王陛下！私、今日は疲れ切っていてとてもそんな気分ではございませんの、陛下を満足させられるとも思えぬゆえ、このまま休ませていただきます！！」

示詩の物凄い剣幕に圧された体で、座龍は払われた手をさすりながら、「そ、そうかい。それもそうだな」と言つてさほど残念な素振りも見せずに自室へ戻っていった。

取り残された示詩は、自分で言った手前表面には出さなかったが、そこであっさりと引きさがる座龍にもまた、腹を立てた。

「この、花も恥じ入るほどの美貌を誇る私を、初夜に一人になさい

ますの!？」

思わず口に出して叫んだが、虚しいばかりだったので本格的に寝入る準備をすることにした。

部屋係を呼ぼうとも考えたが、それすら億劫になるほど疲れ切っていたので、全ては明日に任せ、怒りも明日へ持ち越すことにして、寝台へ倒れこむように寝そべった。

薄れていく意識の中で、示詩は、あの生意気な目をした子供を懐柔してやる、と密かに決心していた。

そう、半ば諦めの方向へ向かっていた示詩の王位篡奪計画は、怒りを持ってして息を吹き返していた。

転んでもただでは起きないどころか、状況が窮すれば窮するほど、この姫は燃え上がるようだった。

待つてなさい…私をこけにした償いはきっちりとお支払いいただきますわ!

示詩が眠りの中でそんな熱意を燃やしているとき、別の部屋では、「へつくしゅん!」と違う場所で同時にくしゃみをする父親と子供の姿があつたなどは、もちろん誰も預かり知らぬことである。

第二章 竜の国 嵐を呼ぶ婚儀・了

其の四（後書き）

せっかくの初夜がこのありさまですよ…
甘くなるのはいつになるやら…

其の一

コン、コン。

泥のように沈んでいた意識の中で、何かの金属が叩かれる音が響いた。

示詩は、疲れ切った体が、いつものように目覚めを強制するのを良しとしていないのを感じ、「ううん」と唸って寝返りを打つ。

再び安息の眠りへの誘いが訪れ、示詩は素直にそれへ身を任せた。

コン、コン、コン。

しかし、その眠りへの誘惑を阻止するかのごとく、金属が柔く叩かれる音は段々と回数と激しさを増して行く。

コンコンコンコンコン！

やかましいことこの上ないのだが、示詩は何しろ身を起すのが億劫で仕方がない。

他人に目覚めを強制された経験もそれほどないため、無意識に無視を決め込んでいた。

しかし、やがてくる激しい呼びかけによって、それは急激に阻止された。

ダンダンダンダンダン！！

「母上ー、母上ー！！起きておられるかー！！」

遠慮のない殴打の音とともに、幼い子供の声がかくぐもって室内に届いた時、示詩はとうとう堪らずに身を起こしていた。

「おやめなさい！！このような早朝から、一体何事ですか！！ここはそなたの母上の部屋などではありませんのよ！！」

寝起きゆえか、示詩は淑やかさを装うのも忘れ、激昂して声の主に言い放った。

園恋宮では諸事情によって庶民の子供の世話をすることもあつたため、示詩は寝惚けて園恋宮と間違ひ、またぞろ子供たちが自分を頼ってきたのか、と勘違いしたのだ。

しかし、ここは園恋宮ではなく、また示詩の立場も、園恋宮に居た時とはガラリと変わってしまったている。

従つて声の主は、庶民の子供などでは勿論ありえなかつた。

「母上。竜脊にございます」

「なっ……は、ははうえ……？」

「昨日、父上と約束をいたしましたゆえ、竜の卵を見に参りましたよ」

それを聞いた時、示詩は夕べの、振り返りたくもない嫌な記憶を一瞬で取り戻していた。

昨夜、示詩は歳火国王・座龍の本性を垣間見、また、その座龍がすでに子持ちであり、己がその子供の世話をするために召喚されたという事実が、改めて思い出される。

深い安眠によっていくらか癒された体は一気に疲れを見せ、示詩はほろっと深いため息をついた。

どういいういきさつかはともかく、母上と呼んで自分を起こしにきた竜脊の存在がひどく重く、鬱陶しくも感じられた。

「母上、部屋に入ってもよろしいか」

「……竜脊様、女人の部屋に早朝からお入りになるなど、例え相手がお母上であつても失礼にあたることですよ」

「ですが、今は早朝でないゆえ、構いませぬか？」

「何を……」

「俺はもう昼餉をすませたゆえ、早朝ではございませぬ。竜舎へ参りましょう、母上」

それを聞いて、示詩は途端に寝台から跳ね起きて、部屋に設えられた窓から外を見やった。

高い塔の五階付近から見える眺望は素晴らしく、歳火国の全土を見渡せるのではというほどの眺めであつたのだが、そんなことは今の示詩にとつてはどうでもよい。

緑青の大きな瞳は、眩しい太陽しか映していなかった。

「日が、あんなに高く昇つて……」

示詩は起きて早々に座り込みたいほどの激しい後悔を覚えていた。

なんとという失態でしょう！

王族の身分の者が昼を過ぎるまで眠っていることなど、さして珍しいことではない。

示詩が問題としているのは、この場合、己が座籠を含めた緋竜城の者達に対して隙を見せたことに他ならなかった。

ただでさえ小国の姫として見くびられている所へ、昼日中まで情眼をむさぼつたとあつては、噂の槍玉に挙げられることは必至だ。

示詩はそこまで思っていたって、さらに伴の者が皆帰されていたことを思い出すと、下唇を噛んだ。

こういうことですね、座龍国王陛下…。私の『威厳』まで
摘み取るつと…この城で飼育殺そうというお考えなのですか…

せめて伴の者を一人でもつけていれば、この部屋に控えさせて失態
を免れることができたであろう。

示詩は姫でありながら、大体のことを自分で管理できる能力を持ち
合わせている。

それでも、侍女や家人がいないのはこれほどまでに不便かというこ
とを、身にしみて思い知らされた。

「母上、母上！」

扉の外から遠慮もなく呼びかけてくる声が、示詩を落胆に浸らせて
はくれない。

それが示詩の過敏になっている神経に障り、よほど「私は貴方の母
上などではありません」と口に上らせたかったが、寸で思いとど
まった。

気を紛らわすように大きく息を吐くと、先ほどから疑問に思ってい
たことを問いかけてみる。

「そのように大きい声でお呼びにならなくとも聞こえておりますわ、
竜脊様。…それよりも、竜の卵を見るなどという約束、私は誰とも
交わしてはおりませんわよ。陛下と竜脊様の間で交わされたものに
ございましょう。なぜ、私が参る必要があるのです？」

それは聞き様によってはかなり嫌みに取られそうな言い方ではあつ
たが、示詩にしてみればなんら含むところのない、単純な疑問に過
ぎない。

そして幼い座龍も、示詩の温情のない言葉を気にかけるような繊細
な神経など持ち合わせてはいなかった。

「今朝早く、父上に竜の卵を見せて頂きたいと頼んだら、母上と共に参るようにと言いつかってきました。それゆえ、俺は母上と行かねばならぬのです」

「何を勝手な…」

思わず怒りが言葉となったが、仕方なしと諦めるより他はない。

何しろ、示詩は夕べ、竜脊の世話をする覚悟はある、というようなことを宣言したばかりなのだ。

とはいえ、示詩は着替えも済ませずに眠りに陥った上、髪や装飾なども昨日のままである。

これには、さすがの示詩であっても一人で支度するのが困難であるため、侍女に手伝ってもらうしかなかった。

「承知いたしましたわ、竜脊様。それでは私は支度を済ませますゆえ、誰か侍女をお呼びいただいてもよろしいでしょうか？」

「そうか！やった！侍女ならここにいますぞ」

竜脊は興奮のあまり口調を正すのも忘れていたが、示詩が咎めることでもなかった。

示詩がその時点で咎めなくなったのは、むしろずっと控えていたらしい、侍女の方である。

「いつから控えていたのです？早くお入りなさい」

「は、はい、正妃様！失礼いたしますです！」

示詩の予想に反して、幼く、たどたどしい口調の聲が扉の向こうから聞こえてくると、数拍置いて、きいという開閉音とともに、一人の小柄な少女が部屋に入ってきた。

「お、お初にお目にかかります！私、このたび、正妃様のお世話をさせていただくべくお城に上がりました、お側付きの『桃衣ももい』と申します！どうぞ、お見知りおきを！」

深ぶかと頭を下げた少女は、いかにも側付きの侍女としては頼りなげな、新参者のようだった。

そして、その口調の端々に独特の訛りが見られることから、桃衣という侍女が地方の田舎から来た下位の家柄の者であることが知れた。

示詩はことごとく見くびられている己の身の上を嘆きながらも、一人で何もかもをこなすよりはましかと考えて妥協した。

気位の高い性質の示詩ではあるものの、この程度の妥協なら園恋宮にいた頃から幾度も経験してきた。

頼りない家人達を取り仕切っていた頃の苦勞を思えば、何ほどのこともないという思いで、示詩は目の前の侍女を見た。

多少田舎臭さは抜けきらないながら、見目はよく、服装も清潔に整えられている。

示詩よりも小柄な体は子供のようでもあったが、深く落ち着いた色を湛える瞳を見れば、彼女が見た目よりしっかりしていることが窺えた。

示詩は、ふむ、と桃衣の人となりを判断すると、側へ呼んでさっそく支度を任せた。

その間、待ちきれない竜脊が幾度か部屋へ入ろうとしたが、その度に示詩は「竜の卵が見れずともよろしいのですか」と脅しをかけて黙らせた。

座龍が説明した印象とは違って、示詩の目には、竜脊がそれほど手のつけられぬ子供には思えなかった。だが昨日の今日では結論を下すのはまだ早い。

示詩は気を引き締めて、鏡台の鏡に映る自分の表情に、自信の笑みを浮かべた。

支度が終わるのは、思いのほか早かった。

桃衣は、口調や動作にあか抜けない部分があるが、それを補って余りあるほどの仕事の正確さに、示詩は思わず舌を巻いた。

そつがなく、丁寧で、センスがよい。

目を開いて鏡台を覗きこむ示詩の横で、ひたすら申し訳なさそうにおろおろとこちらを伺ってくる桃衣に、示詩は一言こつ尋ねた。

「そなたは、いつからこの城で勤めているのですか？」

「は、はい、正妃様！およそ、三月みつきほど前からでございます」

「三月…！…それでは、短い間でよほどたくさん習い事を会得したのでしょうかね」

「いえ、そんな…私のような者がお城に召されただけでも奇跡のようなことでございます！その…正妃様のために習い事ができるだけでも幸運なこと였습니다」

卑屈とはいかないまでも、あまりにも貴族の娘らしからぬ殊勝な言葉の数々だった。

歳火国王のように猫をかぶっている様子でもないのに、示詩は不思議になつて言った。

「正妃とはいえ、私は先日この国に着いたばかりの余所者ですよ。そのような私に仕えるのが、それほど幸運なことなのですか？」

すると、桃衣はとんでもないという風に勢いよく首を横に振ると、たどたどしく答えた。

「いいえ、正妃様！私は、赤社国出身の母を持っておりますゆえ、正妃様をこの国にお迎えする前から存じておりました！ですから、示詩様のお美しさ、素晴らしさも、もちろん母から聞かされており

ましたゆえ、私、正妃様をお慕い申しあげておりましたのです！」

桃衣の口調は色んなところが流暢さに欠けていたが、しかし誠意のようなものは補って余るように満ちていた。

そのらんらんとしたつぶらな瞳にはありありと尊敬の念が込められており、紅潮した頬が示詩を前にしての興奮を物語っている。

控えめな少女のように思われたが、己が信ずる所に関しては正直であるらしい。

そのように純情な人間を目にしたのが久しぶりである示詩は、若干引き気味になりながら桃衣にねぎらいの言葉をかけた。

「そ、そうでしたか。では、そなたの母上にも礼を言わねばなりませんわね。そなたのように実直な娘を私の為に手放したこと、たいへん痛み入り、感謝申し上げますと。そなたも母上のご期待に添えるよう、一層励まねばなりませんわよ」

これが赤社の侍女たちを相手ならば、たちまちに煙たい顔を向けられることであろう。

しかし、桃衣は違った。

紅潮した頬を更に耳まで赤くさせると、瞳を感動で潤ませて、喉を詰まらせながら答えた。

「は、はい……！はい、正妃さま……。私、正妃様の半分でも立派になれますよう、誠心誠意お仕えいたしますです……。そのようにもったいなきお言葉をおかけいただいたのですから……」

示詩は、かなり戸惑っていた。

やることなすこと、この桃衣という侍女は今まで見てきたどの侍女とも違っている。

それが身分やお国柄の違いのせいかどうかは分からなかったが、国

元での示詩の評価を知っていながらこのように親愛の情を向けてくる少女が、示詩には理解できなかった。

全幅の信頼を寄せるわけにはいかないが、少し頼りにしてみるのも良いかもしれないと、示詩は初めて他人の力を頼みにすることを自分に許した。

「ですが、その前に」

「はい？」

「まずは、その口調をなんとかしなくてはなりませんわよ。このような、どんな悪鬼魍魎がはびこっているとも知れぬ城の中で、そんなの様子は余りにも無防備に過ぎるといふもの。良いですか、『ます』のあとに『です』はつけませんのよ！」

「は、はい、申し訳ございません、正妃様！」

「分かればよろしいのです。同じことを二度は言いませんわよ」

「はい、肝に銘じます！」

示詩の手厳しい指摘にめげる様子もなく、桃衣はその後二度と、間違った言葉づかいをすることはなかったという。

桃衣は、どうやら示詩が思った以上に優秀な人材だったようだ。

其二

歳火国の伝統衣装に身を包んだ示詩は、さっそく竜舎の方へ向かうことになった。

いまだ城に不慣れであるにも関わらず、最初に行く場所が竜の飼育舎とはこれいかに、と不満げな示詩である。

しかし、先日誓った「竜脊を懐柔する」という野望にはもってこいな流れではあるので、胸に溜まる不満をなんとか押さええて竜脊の後に従った。

驚いたことに、示詩より三月も前に城に上がっていた桃衣ですら、竜舎に足を踏み入れるのは初めてであるとのことだった。

なんでも、おいそれと関係者以外の者が入れる場所ではないらしい。

「そのように秘匿性がある場所へ、何の許可もなしに訪れて良いのですか？」

「正妃様や王族の方々は特別の権限がありますゆえ、特に問題はなないように思われます。ただ、私がお伴としてご同行いたしますことには、どのような判断が下されることか分かりかねますが…」

示詩の疑問に、桃衣は丁寧かつ自信なさげに応えた。

示詩の側付きの侍女として初の伴ということもあって、彼女には自覚や自信というものが足りないようだった。

そのことに不安を覚えた示詩だったが、桃衣が決して愚鈍でないことは知るところだったので、「しっかりなさい」という小言を授けるにとどめた。

桃衣は恐縮して、「申し訳ありません、正妃様！」と思い切りよく頭を下げていたが、あまりの委縮ぶりを見かねた竜脊に「お前はおかしなヤツだな」と笑われてしまう始末だ。

どうやら、赤社においてだけではなく、歳火国にしてみても、桃衣

は少々変わった娘であるらしい。

だが、たった三カ月前に王城に上がった娘とは思えぬほど、内情は重々把握している。

どんな質問を浴びせても、大抵のことはそつなく答えることから、示詩は桃衣が不慣れである故に頼りないだけではないか、と、桃衣の優秀さを確信し始めていた。

道すがら城の案内などを聞きながら、示詩は塔の六階から一階へ降り立った。

その間、城勤めの家臣たちに会ったりしたが、どの者も皆一様に愛想がなく、探るような目で示詩を見てきて会釈していった。

緋竜城に居る者たちは、皆派手派手しい衣装に身を包んでいるが、性格はまるで反対であるかのように暗く、にこりもしない。

だが、ふと考えて、示詩はそれが「己を敵と見なしている」ためかもしれない、と推測した。

しかし、他国から嫁いだばかりの示詩へ対するだけのものならまだしも、彼らの無愛想な様子は幾分かは馴染んでいるはずの桃衣や、それどころか、敬う対象であるはずの王位継承者、竜脊にすら変わり映えを見せない。

異常ともいえるその様子から、示詩はこう結論付けた。

（ここは、いつ敵に攻められるとも知れぬ、戦の絶えぬ国、歳火……。大国といえ、常に用心深くあるようにと教えを受けているのかもしれませんわ）

そう解釈した示詩の後押しをするように、桃衣が話を切り出した。

「正妃様、緋竜城の人たちを、冷たいとお思いになりましたか？」

「ええ、桃衣。正直に言っつて、そのように感じられました……。ですが、冷たいというよりは、疑り深い、という風に見受けられますわ

…。なにか、常に気を張っているような…」

桃衣は示詩の答えを聞いて、少しだけ声を押さえて言った。

「さすが正妃様、ご慧眼であらせられます。おっしゃる通り、ここに住む人々、あるいは城通いをする者は、王のお達しにより、常に気を張っているようにと教えを受けているのです。例え顔見知りであっても、それが目上の者であっても、用心を怠ることのないように、と」

示詩には、それを破った者がどうなるのが容易に想像がついた。たちまちに身を引きずり降ろされるか、食いものにされるか、そんなところだろう。

赤社の王宮のように、優雅に笑顔を振りまいて歩いているようでは生き抜いていけない場所、それが歳火の緋竜城なのだ。

「国王様は、陛下ご自身を含まれた王族の方々であっても、そのように振る舞うように、とお達しにされました。今から、七年も前のことだそうですね」

「七年前といえば、陛下が御即位された年ではありませんこと？」

「その通りでございます。陛下は、即位後まもなくして、この緋竜城のそれまでの掟を全て一新されたのでございます。…業碧との戦役において、この国を作りかえると仰せになられて…」

「業碧との、戦役が関係ありますの…？」

「私も、その当時はまだ幼少でありましたゆえ、恥ずかしながら詳しい所を存じておりませんが、史学を習いました折にはそのように教えを受けました。なんでも、業碧戦での経験から、それまでの常識を覆すような法を多数お定めになられたとか…」

示詩はそれへ、何の気もなしに疑問を投げかけた。

「その、業碧との戦での経験というのは、一体どのようなことだったのです？勝者となった歳火であっても、それほど学ぶ所が多かった事柄ですの？」

「それはもちろん、陛下の側室であられたも……」

「おい、侍女！」

突然、桃衣の言葉を遮る鋭い声があがった。

声の方へ示詩と桃衣が顔を向けると、それまでまったく口を挟むことのなかった竜脊が、後ろを振り返って睨みつけていた。

その瞳には、7歳の少年らしからぬ烈烈とした怒りの炎がちらついでおり、それはすべからず桃衣へと真つすぐ向けられていた。

「それ以上を言ったら、お前の身がどうなるか分かっているのか！？」

「っ！も、申し訳ございません、竜脊様……！」

冷え冷えとした竜脊の声は不自然なほど大人びており、示詩ですら冷や汗を背中に浮かべるほどだった。

一体、この小さな体のどこにそれほどの威厳が詰め込まれているというのか、他を圧倒するようなその迫力は、父である座龍に勝るとも劣らない。

まさにあの父にしてこの子あり、である。

だが感心してる場合でもなかった。

己より半分以上も生きていない子供に気圧されたことに悔しさが込み上げて来て、示詩は気を取り直すように竜脊をたしなめた。

「り、竜脊様。今は、私が話を聞いておりましたのよ。桃衣を叱るのは筋違いというものではございませんこと？」

すると、竜脊はけろっとした顔になり、元のあどけない様子を取り戻して言った。

「失礼いたしました、母上。しかし、こいつは話してはならぬことを話そうとしたのです」

「せ、正妃様、私が悪いのです、申し訳ございません！！正妃様のお言葉にはすべてお答えしたいと思っておりますが、何卒、こればかりは……」

示詩は、二人の様子から、今桃衣が話そうとしたことが何らかの掟に抵触することだったのではないかと推測した。

そして、現時点の示詩の立場では触れてはならぬ部分であることも理解した。

（身内であれ、目上の者であれ、用心を怠らぬように……とは、こういうことなのでしょうね）

「……分かりましたわ。私も、隠そうとする物を無理に追求するほど無粋ではありませんもの。良しといたしましょう」

「あ、ありがとうございます、正妃様！！」

まるで命を救われたかのように手放して喜ばれてしまえば、示詩にはもう何も言えなかった。

相変わらず、無愛想な城の中で桃衣だけが浮いているので、己よりもよほど桃衣の方が気をつけなければならないのでは、と示詩は呆れ返った。

竜脊もそんな桃衣の様子に驚いているようで、ぽかんと口を開けて見ている。

緋竜城の意外な側面を見た示詩は、竜脊が年相応の顔を見せていることに、桃衣のある意味での凄さを見つけていた。

優秀さを見せたかと思えば、その次の瞬間には素朴で純情な娘に戻る。

この城で三月もその様子で生き延びたとあれば、侮れませんか、この桃衣という侍女……。

緋竜城一階の空洞部分にある中庭を通って外へ出ると、広大な庭とその奥には森林が広がっていた。

竜舎はその広大な庭を分け入った林の手前にあるそうのだが、示詩はともではないが、馬車も輿もなしにそこまで行ける気がしなかった。

何しろ、一つの町がすっぽり入ってしまうのではないか、というほどに広い庭なのだ。

辿りつくのに早くとも半日はかかりそうだった。

「え、なぜだ、父上に許可はもらっているぞ！」

だが、示詩の懸念をよそに、話はどうやら別の方向へ転がっているようだった。

「まことに申し訳ございませんぬ、竜脊様。しかしながら、竜の卵は秘蔵のものでございまして、例え竜脊様といえども、お見せするわけには参りませぬゆえ……」

黒くて分厚い羽織を身に付け、頭にも不思議な形状の頭巾をつけた数人の男たちが、幼い竜脊の身を阻むように中庭の通路に立ちはだかっていた。

彼らは、言葉ではさも申し訳なさそうに恐縮している様子を見せて

いるが、その表情や態度にはありありと厄介だというような様子が見受けられた。

執拗に食い下がる竜脊には悪いが、示詩は内心でしめた、と思わずにいられない。

何しろ竜の卵などというものにはカケラも興味がなかったし、その興味がないものを見る為に半日はかかりそうな道のりを歩くのは、どうにも億劫で仕方がなかった。

それに、昨日までの長旅の疲れが癒えきらぬうちに、そんな無駄な運動をしたくはない。

本音ではそう思っていたものの、情熱に燃えているもう一人の示詩は、今こそが好機だとしきりに訴えてかけていた。

ここで竜脊様のお味方になって差し上げれば、お心を掴むのが容易くなるはず。今です、今、さも慈悲深き信女のように振る舞うのです！

優しいな美女を装い、見るに堪えないといった風情で他者の同情を誘うのは、得意中の得意とする示詩だった。

しかしながら、本音ではこのままお流れとなつてほしいと思つているため、中々行動には移せない。

そうこうしているうちに、ずんぐりした黒服の男たちの中から、身なりが幾分か整っている、いかにも位の高そうな年配者が進み出てきた。

たっぷりとした白い髭を蓄えたその老人は、厳めしい顔つきで竜脊を見下ろすと、不遜な態度でこう言い放った。

「竜脊様、それ以上我がまを言われては、また皆の者に誹りを受けましようぞ。王族に名を連ねるお方が、そのように低俗なお振舞いを見せていかがいたします。…まったく、華観様や林我様のご嫡子であれば、このようなことを言わずとも済んだものを…」

「よ、沃賀」

示詩には、そこで竜脊が初めて怯んだかのように見えた。あれほど傍若無人に振舞っていた竜脊が怯むとは、何者なのか。

「本来であれば、城を追い出されてもおかしくはない立場だということに、勉強もせず遊び呆け、拳句の果てには国の秘蔵の宝である竜玉をご所望とは……いやはや、さすがあの座龍様の血を引くお方。卑しさがにじみ出ておいでにでございますなあ。血は争えぬとはまさにこのこと、とでも申しましょうか。はっはっは……」

示詩は思わず耳を疑った。

いくら緋竜城で我がままの限りを尽くしているとはいっても、竜脊はれっきとした座龍の嫡子であり、王位継承者には違いない。

そういった身分の竜脊に対して、今の発言はあまりにも聞き捨てならない言葉の数々だった。

示詩は思わず竜脊の前に身を躍らせた。

「そなたがどのような身分の者かは、この城に来て日の浅い私には分かりかねます。しかしながら、今の言い分は余りに不敬ではございませんこと？ここにいらっしゃるのは、そなたの主君である最高位にして絶対的権威をお持ちの、座龍国王陛下のご嫡男でしてよ。撤回なさい！」

己よりわずかに背の高い相手を強く見据えて、示詩は迷いなく言いきった。

すると、相手は小馬鹿にしたかのような低い笑いを洩らすと、皺皺の顔をゆっくりと下げたお辞儀のようなものをした。

「これはこれは、挨拶もせずにご無礼をいたしました。赤社より参

られた：正妃様。私は、歳火国竜学師の長を務めております、『沃^よ賀^{くが}』と申す者。以後、お見知りおきを……」

「そうですか。では、沃賀。そなたに竜脊様への陳謝を求めます。即刻、謝りなさい」

示詩のにももない言葉に、その場にいた者全員がぎよっとして示詩を見た。

竜脊ですらきよと、と大きな目をさらに大きく見開いている。

桃衣に至っては、白い顔を極限まで真っ白にさせて何事かを告げようとしていた。

「失礼ながら、正妃様……。私が進言いたしましたのは、すべて竜脊様の為を思つてこそでございます。竜の卵とは、生竜玉^{せいりゅうぎよく}とも呼ばれまして、この国では至高の宝でありますれば、例え殿下であつてもおいそれとは……」

「そのような説明はどうでもよろしいのです、私は竜の卵がなんであるかを問うているではありませんわ。竜脊様への不敬を謝りなさいと言っているのです」

「なんと……！」

示詩が全く態度を変えず、頑として言い分を取り下げようとしないうちに、沃賀は皺皺の眉間に更に皺を寄せて不快を露わにした。

示詩はそれを見て、沃賀という者が、恐らく竜脊や王族の者に不敬を言つても許される立場にあることを察したが、それでも竜脊への言い分には我慢がならない。

この際、竜の卵を見るか否か、竜脊の味方をするか否か、という先ほどまでの葛藤はどこかへ消え去っていた。

黒服の男達の周りも、ぴりっとした緊張で包まれており、一步も引かぬ示詩と戦いも辞さないともいうような、穏やかでない空気が高まった時だった。

「なになに、卵ー？卵ならこー、こーにあんぜー、こー」
「！？」

その場にそぐわぬ気の抜けた声が突如響き渡り、怪しげな黒服の男が右の植木の辺りからひよいと顔を出した。

な、なんなのです、この奇怪な男は！？

その男の登場にいち早く反応したのは、どういいうわけか、真っ白な顔で行方を見守っていた桃衣だった。

「ひ、『緋仔^{ひい}』！？…緋仔、よね！？」

「そーそーそー、緋仔、緋仔ね、俺。で、卵でしたっけ、卵。ほ、ほら、これ。た、卵」

緋仔と呼ばれた男は、事情を知ってるらしい桃衣には目もくれず適当にあしらった。

どういいう目をしているのか分からないほど分厚い眼鏡^{がんきょう}を目につけ、ぼさぼさ頭に小汚い格好の男は、手に黒くて丸い、一抱えはありそうな大きな卵を抱えていた。

それを見て今度顔を真っ白にさせたのは、示詩と対峙していた男達の方だった。

「ひ、ひ、ひ、緋仔、き、き、貴様、それを、一体どこから…！？」

さきほどの余裕を保った態度はどこへやら、沃賀が声を何度もひっくり返して緋仔に聞いた。

すると、緋仔は黒くて大きな卵をぼーんと片手で投げあげて弄びながら、ぎゃはははは、と笑って言った。

「ど、どこつて、竜志学所の安置室からに決まってるじゃないですか。あ、あ、あそこにしかねーんですから。ぎゃはははっははっはははー！」

「な、何を訳の分からんことを…！あそこは私の許可なしに、何人たりとも足を踏み入れては…ああつ、そのように乱雑に扱うでない、馬鹿者めが…！」

「そ、そのアンタより偉い人に命令されたので、足を踏み入れて良いのですよ、ぼ、ボクは。大体、大体、ボクが研究をする分には、誰にも指図を受けなくてもいいと言われたの、わ、忘れましたか？忘れてない、わ、忘れてませんよね沃賀様？」

くねくねと予測不能な動きをする緋仔は、危うげな手つきで竜の卵だというそれを弄ぶので、黒服の男達と沃賀ははらはらとしながら言葉を返す。

「私より偉い、だとお！？よもや、座龍様か！？」

「そーそー、そうです、座龍様。ね。座龍様。国王様。逆らえないに決まってるでしょ。さ、逆らえないでしょ、それは」

「このような、このようなことが罷り通ることこそ、まことの国難といえようと言うのに、現国王の愚行の数々…！なんたる情けない王であることか…！」

またも不敬な言葉に、呆気にとられていた示詩の怒りも吹き返すかに見えたが、それは第三の男によって憚られた。

「その情けねえ男つてのは、俺のことかい？沃賀」

「へ、陛下…！」

いつからその場にいたのか、朱と浅黄の薄絹を羽織り、着崩した格

好の座龍が、面白そうに目を細めて顎を撫でていた。

「い、いえ、決して、そのようなことは…」

さきほどまでの偉そうな態度を改めた沃賀は、腰を低くしてしずかずと頭を垂れた。

後ろに控えていた黒服の男達もそれに従う。

「へっ、まあいいさ。今回は、俺も我がままをムリに通しちゃったしな。手打ちつてヤツにしちゃくれねえか。なあ、沃賀」

「ははっ、陛下の仰せの通りに…」

「そうかい、悪いな。そんなら、下がっていいぜ」

「は、御前を失礼いたします」

現れた時とは態度をまったく異にして、逃げるように男達は去っていった。

去り際に、緋仔が「威張ってるからこうなるんだよ」と言って沃賀に思い切り睨まれ、「す、すいません、すいません嘘です…はは」と、こちらも態度を一変させて謝り倒していた。

何が何やら、全く状況が掴めない示詩は、とりあえず、現れた第三の男に対して、

「どういふことが、納得のいくご説明をしていただけますでしょうか、陛下？」

と、これだけは強く言って、相手に睨みをきかせたのだった。

其の二（後書き）

どうでもいい補足：新キャラ、壊れた男の緋仔にはモデルがいます。
変人以外の何物でもありませんね、この書き方だと…

其の三

竜舎から少し離れたところに、竜の生態について研究している者達の塔がある。

竜舎同様に、城からだいぶ離れた位置にあるので、皆馬車を使って訪れるとのことだった。

竜舎にはやはり女性が足を踏み入れることはないらしく、とても危険だということで、座龍から直々に止められた示詩と桃衣だった。

「それでは、なぜ竜脊様に私と共に参るように、などとおっしゃられたのですか」

座龍と緋仔についていく形で研究塔に足を踏み入れた示詩は、湧きあがる怒りを押さえながら言った。

そもそも、竜脊に卵を見せると約したのは座龍であり、示詩にはなにも関係がないはずだった。

すると、座龍は暗い研究塔の一階奥にある部屋へ案内し、憤慨する示詩を招いた。

「まあ、そう怒らねえで聞いてくれや、お姫さん。これはちょっとした手違いってやつでな」

「手違い??」

示詩がますます眉を吊り上げて聞き返すので、座龍は弱り果てた体を取りながら、部屋の中央にある長椅子に示詩を座らせる。

「とりあえず腰を落ち着けて、ゆっくり構えようじゃねえか。ここ

はこの塔唯一の応接間だな。俺が即位したとき、好きに作り変えた場所だ」

聞けば、座龍が即位するまでの竜研究塔は、不衛生で、内部の者達による独自の統制が罷り通るような、排他的な場所であつたらしい。だが、その奇行や横暴ぶりがあまりに酷くなり、見かねた反竜学士派の貴族達によって先王の夕栄ゆっえいに嘆願書が出された。

しかし、当時から竜学士の長にして竜学の権威であつた沃賀によつて、王の手に渡る前に握りつぶされ、反竜学士派の首謀者だつた者達も沃賀の口車にのつた先王の命で左遷となり、竜研究塔の改革はあつけなく崩れ去つてしまつた。

だが、新王の座龍が王位を継承すると、事情は変わった。

これまでの歳火の法を覆すような政策を次々と発した座龍は、その中に竜研究塔の改善策をいくつか打ち出していた。

まず不正を行っている竜学士を排除し、実力のある者、学の立つ者だけを集め、新生竜学士団を作り上げた。

そして竜研究塔の古い統制を取つ払う為、反竜学士派の改革者だつた者たちを左遷先から全員呼び集めて、全く新しい体制を整えるよう命じ、実現させたのだ。

その新体制の中に、座龍も少しだけ口を出していたらしいのが、この応接間の設置だということだつた。

それが設置されたことは、歳火国にとつても大きな意味を果たしたといえることらしい。

「応接間を置いたつてことは、ここに来る者が竜学士だけじゃなくなつたつてこつた。それが歳火にとつてどれほど衝撃だつたかなんぞ、他国から来たあんたにや分からねえだろうが…。とにかく、当時は革新的なことだつた、俺達からすると」

「…そうしますと、この塔は、陛下が御即位なされるまで治外法権的な場所であつた、と取つてもよろしいのでしょうか」

「さすが姫さん、頭の巡りが早えな。ま、言っちまえば、それまでの王がいかにも不甲斐ない脳なしだったかってことさ。この塔がまともにも機能してたのは、三百年もさかのぼった時代の話になる。十一代王の竜賀王りゅうがが作ったとすると、実質的には…百年ももっちゃいなかったってことだ」

十一代国王が統治するまで歳火が混迷を極めていたことは、赤社の生まれである示詩であっても知るところだった。

示詩が目を通した『歳火国史』にもあったように、戦に次ぐ戦で疲弊しきつた国内を瞬く間に潤し、完全統一を成し遂げたのが、今から10代遡った時代の歳火国王、竜賀王である。

歳火国は彼の登場によって大国まで上り詰めたといっても過言ではない。

竜を乗りこなす方法を広め、そしてその専門機関を設けたのもこの王による功績だった。

だがその素晴らしい功績も、時の流れの中で風化していき、さらには腐敗した、と座龍はいうのだ。

「長く放っておかれた特権的な研究塔は、反乱の温床にもなりかねん。事実、さつきあんたも会ったあの沃賀ってじいさんなんかは、たとえ俺が国王だとしても言うことを聞きやしねえ。強力な後ろ盾がわんさとありやがるからな。下手にクビになんかすると、危ねえのはこっちの方になっちまうのさ」

「応接間の設置は、では、竜学士の特権に王族が介入する突破口とということですね。随分荒い方法のようにも思われますけれど」

「これでも譲歩した方だがな、こっちは。家臣から竜学士団から何から、反論がひどいのなんの、俺が通そうとした案の半分以上は流される羽目になった。そういう意味じゃ、この塔にはまだまだ改良の余地が残されてる、ってことかもしれねえやな」

「ですが、お言葉ではございますが、陛下はその改良を今より後に

進行するおつもりなのでしたら、私には少し時期が遅過ぎるように思われるのですが…」

またも忌憚のない意見に、座龍は鋭い瞳をやや細めて隣に座る若い正妃を見た。

「そつかい？なぜそう思う？」

すると示詩は、意思の強い大きな黒目がちの目を少し泳がせた。彼女にしては珍しく口にするのをためらっている仕草だった。

その様子を察したのか、座龍は苦笑しながら示詩の形のいい頭を撫でた。

「いいぜ、なんでも言ってみな。この部屋にはいま、俺とあんたしかいねえんだ。それに、あんたは今、正式な俺の妻って立場になる。夫婦の間に遠慮はいらねえだろう」

座龍の言葉通り、この応接間にいるのは二人だけだった。

あとの三人、竜脊、桃衣、緋仔は、研究塔の中を見たい、とこねた竜脊の言葉を聞き入れて別室にいる。

「…さきほどの、沃賀殿のことですわ」

「ああ、あのじいさんな。あんたが、一步も引かねえで食ってかかっているを見ていたよ」

見ていたのならなせもつと早く姿を見せなかったのか、と示詩は思ったが、口には出さなかった。

今はただ、沃賀の心ない言葉に反論もせず頼み込んでいた竜脊の姿が目焼き付いて、それをなんとかしななければという気持ち先立っていた。

「あの者は、竜脊様が王太子であるにも関わらず、貶めるような言葉を吐き、そしてそれを撤回しようとはしませんでした。そして、背後に控えていた…竜学士たちもそれと似たような態度をとっていましたわ。そして、座龍様への仰りよう…とても捨て置けるようなことではないように見受けられました」

「まあな、あいつは竜学師長といって、この国の竜学に置ける最高権威なのさ。おまけに、俺の母親の兄…つまり、俺にとっては叔父にあたる立場でもある」

「お、叔父君！？で、では……」

示詩は今更になって沃賀に食ってかかったことを後悔した。

しかし、それは己の発言の内容ではなく、立場を悪くする行動をとってしまったことに対するものである。

竜脊への不敬を咎めたことに対して思うことはなかった。

示詩がはつきりと顔色を変えたのを見て、座龍はふつと微笑を見せ、少しすると声に出して笑いはじめた。

「ぞ、座龍陛下？」

「いや、わりい。あんたはおもしれえな。流石は赤社自慢の箱入り姫さんだ。大事にされてきたのが分かるよ」

まだ笑い足りなそうにしながら、座龍は戸惑っている示詩に顔を寄せて、安心させるような穏やかな笑みを向けた。

「叔父と言っても、沃賀は王族じゃない。そりゃ高位の貴族なのは確かだが、あんたはなんといても俺の正妃だからな。比べモンにはならねえさ。気にすることあねえ」

「そ、そうだったのですか…」

「沃賀を好きにさせてんのも、竜脊を放っておいてるのも、今はま

だ機が熟してねえからだ。姫さんが言ったことはまったく骨身に染みる言葉だが、残念ながら今の俺にできることは限られてる。……王様って仕事にも、色々あんのよ」

長椅子の背もたれに両腕をあずけて沈み込んだ座龍は、苦笑いを浮かべて天井を仰いだ。

石造りの重厚な塔は、一室の天井が城の倍ほど高く、全体的に薄暗い。

その暗がりには何を見ているのか、座龍の瞳は陰っていた。

「出過ぎたことを申しました。お許しくださいませ……」

それ以外にかける言葉が見つからない示詩は、座龍の憂い顔を見ながら、そこに竜脊の幼顔を重ねていた。

叶わない望みを必死になつて沃賀に訴えていた竜脊と、虚ろな表情で上を見上げている座龍の様子はよく似ている。

やはり血を分けた親子だな、と思うと同時に、この親子は、もしかしたらお互い以外に心を預ける者がいないのでは、とすら思えてきた示詩だった。

まさか、西の武王として名を馳せている者がそれほどに孤独だとは思えないが、今の寄る辺ない子供のような風情の大男を見るにつけ、示詩はどうしてもその考えを拭えない。

情に流されそうになる自分を叱咤しながら、座龍の手に触れようとした時だった。

ドオン！

どこかから、何かが発したような音が聞こえてきて、示詩ははつとして長椅子から立ち上がった。

「何事ですの!？」

「…ちつ。緋仔のやつ、せつかくいい雰囲気に持ってこうとしたっ
てのに、なんて間の悪い野郎だよ…」

「え!？」

「あ…」

座龍は「しまった」といった表情をして、口に手をあてた。

示詩は、座龍が思わず口に出した本音をもちろん聞き逃しはしな
かった。

そこで、示詩はようやく思い出していた。

(そういえば、私がここにきた目的は、この経緯を陛下から聞き
出すことだったはずでは……!)

おそらく、話を反らしてうまく丸めこもうとしていたのだ、という
ことに気づくと、先ほどの憂い顔にまんまとひっかかって同情した
自分に羞恥と怒りが湧きだした。

多大なるその羞恥と怒りは、そのまま座龍へと真つすぐに向けられ
る。

「陛下……私を丸めこもうとなさったのかもしれませんが、そうは
いきませんわよ」

「い、いや、俺は別に……」

先ほどと違って明らかに動揺しだした座龍は、いかにも「その通り
です」と言っているような焦りようである。

示詩は、一歩も引かない様子で座龍に詰め寄った。

「ご説明いただけますでしょうか!？」

示詩のその迫力に押されるかたちで、座龍は弱弱しく「お、おう」と答えた。

一方、その頃の竜脊、桃衣、緋仔の三人はといえば、竜の卵を持って第二研究室に入っていた。

一階にある第二研究室は比較的簡単な実験を行う部屋であり、招いた客人を見学させることも可能なため、竜脊と桃衣が許可を得る必要がないのだ。

部屋に入るなり卵を触らせると言ってきた竜脊に対して、緋仔はのらりくらりと体を動かしながら言い逃れをしていた。

「俺は父上に許可を受けたのだぞ。もつと近くで見せる！触らせる！」

「し、しかしですね、王子さん、こ、こ、これは、誰でも気軽に勝手に触れるよーなもんじゃなくてですね、へへっ…ぼ、ボクですら扱うのが、難しい、と、と、とっても難しい、わけでございますね…」

「ならばお前が俺に扱いを教えればいいではないか。さあ、教える！」

「いやいや…へへへ、へ…え、ほ、本気ですか？いや、ちよ、ちよつと、ちよつと、む、むむ、無理です！王子さん、冗談がお上手で…。へへっ、へへへへへ…」

「冗談ではない、本気だ。さっさと教える」

「い、いやー…教えろって！お、教えろって、へへっ……いやいやいや、む、無理でございます。む、む、む、無理ですよ、へっへへへ」ボソッ（ば、馬鹿の塊かこの糞餓鬼、し、し、死ね！）

緋仔は妙な動きを交えながら、おまけに不気味な笑いも交えながら

竜脊の執拗な手から逃れていた。

様々な薬品や実験物がそこらじゅうに置いてある部屋で、彼らの足取りは危険極まりないとしか言いようがない。

傍でそのやり取りをハラハラと見守っている桃衣は、一応何度もやめるように声をかけているのだが、二人とも耳を傾けている気配はない。

「あ、あの、いい加減おやめ下さいまし、竜脊様、緋仔殿！」

叱る声にも自信のなさが現れてしまい、とてもではないが苛烈な二人を止められる類のものではなかった。

（それにしても、なんで緋仔がここに…三年前に村から姿を消したつきり、全然消息がつかめなかったのに）

桃衣は黒く野暮ったい服に身を包んだ男を見て、やはり己の知っている緋仔に間違いないことを確認した。

奇抜な言動に、周りを気にしない身なり、櫛を通したことがないかのようなもじやもじやの髪の毛、顔の半分を隠すほど大きくて分厚い眼鏡。

このような男が同じ時代に二人といたことは、若輩者の桃衣であっても分かることだ。

（それにこの竜研究塔に出入り出来るほどの竜学士になったとすれば、かなり高い成績を修めているはず…緋仔は、昔から竜にすごく詳しくかったもの）

竜学を極めたといつて通つてしまいそうなほど、膨大な竜の知識を持ち合わせていた当時の緋仔を思い出して、示詩は一人で納得していた。

(すごいわ、緋仔。あんなことがあったから、出奔してしまったのかと思っただけねど、きつと、志を高く持って一人で励んでいたのね。兄上もどれほど喜ぶだろう)

緋仔と交友関係にあった兄を思い出して、桃衣はくすりと笑って浮かれていた。

それはそれは緋仔を心配していたので、このことを報告すればどんなにか嬉しいだろうと想像したのだ。

(それに、お城には私よりうんと高位の貴族様方しかいないから、なんだか味方が出来たみたいで安心しちゃった。もちろん、正妃様にお仕えできるだけで幸せなことだけど、味方は少ないより多いほうがいいですね)

桃衣はふふつと朗らかな笑みを浮かべて、必死な形相で竜脊から逃げ続ける男を見た。

幼少から顔見知りの同郷者がいると分かっただけで、こんなにも気が休まるとは思っても見なかった桃衣である。

己がどれほど気を詰めて城に出仕していたか、いやでも思い知らされた。

「あ、そこ、危ない、緋仔！」

笑って二人を見守っていた桃衣は、瞬時に血相を変えた。

いつのまにか二人は実験台の上が上がって追いかけてつづいてきたのだ。

竜脊が飛びかかって来るのをかわしたところに、大きな獲のようなものが置いてあって、緋仔はそれにぶつかりそうになっていた。

「う、う、うるせえ！な、なん、なんなんださっきから！だ、誰だよてめえは！！」

突然桃衣の声に反応しだした緋仔は、甕にぶつかる寸前で体制を立て直し、桃衣の方へ向かってきた。

「良かった、危なかったね、緋仔」

「い、いや、だから、だ、誰、お前、さっきから緋仔緋仔って、な、馴れ馴れしく、よ、よ、呼びやがる、お前は、だ、誰だ！」

「あれ、覚えてない？私、瑞淡村すいたんにいた、小学舎の脇の…」

三年も会っていないければ顔も忘れるか、と少し寂しい気持ちで桃衣が自己紹介をはじめた。

だが、体勢を唐突に変えたせいか、緋仔の丈の長い羽織の裾が翻つて甕に当たってしまった。

「あ」

声に出したときには遅かった。

桃衣は、緋仔が後ろを振り返って動きを止め、その後ろで甕の中から光が膨れ上がっていくのをまじまじと見ていた。

近くに来ていた竜脊をとっさに庇って、膨れ上がる光が部屋を完全に覆い尽くした時、大きな衝撃が第二研究室を揺さぶった。

「あああ~~~~！！」

緋仔の情けない悲鳴と共に、唸るような地響きが起きた。

ドオン！

座龍と示詩が耳にした爆発音発生の顛末とは、ざっとこんなところである。

其の四

爆発音を耳にした示詩と座龍は、取り合えず事情の説明よりも原因を探ることを優先させた。

しぶしぶといった体の示詩とは反対に、座龍は焦っているような素振りです足を速めさせていた。

「まったく、あいつら……。俺が塔にいる間に何か起こったら、全部俺の責任になっちまうじゃねえか」

不貞腐れた表情でぶつくさと口にしてる座龍を横目に、示詩は暗い廊下を歩きながら、はて、と首を傾げた。

「それはどういうことでしょうか？陛下はこの国における最高権威をお持ちのお方。でしたら、この件を不問にするなど造作もないはずでは？」

「それが今回、俺は無理やり権力を行使して勝手にこの塔へ入ったって筋書きになってる。その場合、責任の所在は沃賀にはねえのさ。だからここに連れてくる前に、見つからねえように手はずを整えといたつてえのに、竜脊はまったく……」

「……？」

またも独り言のようにぶつぶつ言いだした座龍には、今なにを聞いても空返事以外は期待できそうにない。

示詩は早々に見切りをつけて、歩幅の違う座龍についていくことに専念した。

そのとき、何か近くをよぎるような気配を感じたのだが、振り返っても前を見ても変わるところはなかった。不気味に思いな

がらも座龍の背中を追うことにした。
塔の廊下は薄暗く窮屈で、先の見えない不安を駆り立てるようだった。

「おい、緋仔。てめえ、またやらかしやがったな」

第二研究室にたどり着いた座龍は、扉を開いて開口一番に恫喝した。

「あれほど大人しくしてると言っただじゃねえか。その耳は飾りか？
沃賀に今隙を見せちまったら、お前はここに居られなくなるかもしれねえんだぞ」

声は低く唸るようだったが、どちらかと言うと、王としての苦言、
というよりは、親しい友人か何かのような情の深さが感じられる。

「そ、そ、そんなことを言われてもですな、あんたの息子がまっ
つたく言うことを聞かねえからこんなことになったのであって、
ぼ、ぼくはむしろ被害者であって…」

示詩の耳には、先ほどの得体の知れない眼鏡男のしどろもどろな声
が届いていたが、それがどこから聞こえてくるのかは見当もつかない。

何しろ、第二研究室は、扉を開けた時から一面が白煙で覆い尽くさ
れていて、何がどこにあって誰がどこにいるのか全く分からない状
態となっていた。

「竜の卵に、卵に触らせろって聞かないから、この王子さまが。だから、ぼくは。必死に止めようとしたワケですよ、ええ、ぼくはぼくなり必死にやったワケですよ。でも、でも王子様は、そりゃもう容赦がないワケでして、逃げ回ってたら薬壺なんか、ぶ、ぶつかって、ドッカーーン！ってね。ドッカーーン！ギャハハハハハハ………笑えねーなこれ、今笑ったけど」

座龍はそれを聞いて、がしがし、と乱暴に頭をかくと、ことさらに大きな声で「竜脊っ」と己が息子を呼び立てた。

「父上」

白煙の向こうから、幼い声の、冷静な返事がすぐに返ってきた。

「俺は今朝、お前に『俺が行くまで待っている』とは言わなかったか」

「…聞いてない」

「そんなはずはあるまいよ。お前は『はい』と返事をした。そうだろう？」

「…覚えがない」

「そいつは道理が通らねえ。お前は俺が『母上と一緒になければ許可しない』って言ったのを覚えてたんで、示詩を伴って竜舎へ向かったんだろ？そんなら、そのあとに言った待ってるって言葉を覚えていらねえとは、おかしいじゃねえか」

「覚えがないものは、覚えがない！」

あくまで強情を張る竜脊の態度に、座龍がふつと息を吐き出して俯いた。てつきり呆れ返ったものと思っていた示詩は、次の瞬間の座龍の行動にぎよっとした。

「ぞ、座龍陛下!?!」

慌てて呼びかける示詩には目もくれず、座龍は腰に下げていた剣帯の鞘から、上背ほども長さがある両刃の剣を取り出した。見事な意匠が施された、大ぶりの剣である。

「陽炎!?!」

鋭く叫ぶと、どこかから風が流れてきた。

こんな重厚な壁の隙間から漏れてくるはずもない、と驚くのもつかの間、座龍は狭い部屋で長剣を器用に一振りして、流れてくる風の威力を倍にすると、一瞬で室内の白煙を消し去ってしまった。

「な、なんとということ…」

絶句する示詩の脇を、座龍が剣を収めながら通り過ぎる。

一気に視界の良くなった研究室の中央の方に、両腕と上半身で竜の卵を隠すように丸くなっている男と、竜脊の体をぎゅっと抱きしめて座り込んでいる桃衣の姿が現れた。

「強情なのは、『あいつ』の血か俺の血か知らねえが……」

そう言つて、座龍は前触れもなく竜脊の体を持ち上げると、思いっきり殴りつけた。

ドカツ!

「ぐああっ!?!」

竜脊の小さな体は木の葉のように宙を舞い、そのまま研究室の壁に

ぶつかって落ちた。

「陛下!!!」

「こ、国王陛下!?!」

叫ぶ女達の声が耳に入っているのかいないのか、座龍は二力つと笑みすら浮かべて倒れ伏した息子に言った。

「状況が見えねえ生意気は、ただの馬鹿になりかねねえぞ、竜脊。痛くて悔しいんなら、もつと賢く我を張ることだ。分かったか、バカ息子」

正面に立ちふさがる壁のような父親を、小さな息子はきつ、と睨みつける。震える体は投げ出された衝撃によってすぐにも倒れてしまいそうだったが、竜脊はよろよろと立ちあがって壁に打ち付けた肩を抑えた。

「嫌だ……父上のように、…賢く我を張って手遅れになるのは、絶対に嫌だ!!!」

子供とも思えぬ叫び声は、王子らしからぬ乱暴な口調になっていた。あくまで反抗的な息子を、座龍はつ、と片眉を動かして口元で嘲笑う。

「ほざくじゃねえか、木端のように軽々と飛んでった餓鬼が。言っておくが、今のお前は手遅れ以前の問題だ。俺に啖呵を切りてえのなら、まず同じ土俵に立つことから始めな」

容赦のない、手厳しい言葉だった。

竜脊は、辛そうに青ざめさせていた顔をみるうちに赤くさせて

いった。

肩を抑えている手には皮膚に食い込むほどの力をこめられ、燃え立つ若草色の瞳がきらりと光る。そして、頼りない足元にぐっと重心が置かれ始めた。

まずいですわ！

示詩は予感していた。

おそらく竜脊が座龍に飛びかかるつもりであるうことを。

なぜそうしたのかは分からない。

けれど示詩は、竜脊が体勢を変える前に、とっさに座龍との間にその身を躍らせていた。

「竜脊様、おやめなさいまし！」

「!?!」

突然割り込んできた新しい母親に竜脊はつかの間怯んだが、しかし意思を曲げるつもりはないらしい。

腰をかがめて重心を低くすると、示詩が前に居るのにも構わず竜脊は飛び出していった。

「うあああ!!」

ぶつかる、と示詩が身構えた時だった。

「陽炎！光野！」

「はっ」

座龍の声に、どこかから応える声があがった。

それが分かると同時に、示詩の体は突然何かに抱えられて宙へ浮き

上がった。

「え!？」

見れば、生成り色の衣装に身を包んだ、目元以外を布で覆った人物が示詩の体を抱えて、瞬時に座籠の方へと飛び退っていた。

「そ、そなた…!？」
「……………」

示詩の困惑した声にはぴくりとも反応を見せず、覆面の男はそつと示詩を地面へ下ろす。もう一声かけようとしたところに、示詩の耳にけたたましい声が流れこんできた。

「放せ、放せえ、光野! 貴様、タコ殴りにするぞ! それから海へ流すぞ!」

「りゅ、竜脊様、お願いですから、お静かに! 私たちがここへいることは極秘なのであつてですな…」

見れば、緋色の衣装に身を包んだ金髪の若者が、暴れる竜脊の体を羽交い締めにして持ち上げ、弱り果てた様子で諫めていた。

啞然と口を開けてそれを見てみると、いつの間にか桃衣が横に駆けつけてきて、布巾を取り出し、衣装についた汚れをはたいていた。

「せ、正妃様、ご無事でようございました! 私、心配で心配で、もう少して卒倒するかと……………」

「ええ、桃衣、ですが私より、竜脊様のお体の具合の方が深刻ですよ。あのような小さき身で陛下のお力を一身に受けてしまったのですから……………」

「そ、そうでございました! ……あつ、ですが正妃様、それならき

つと心配には及びません、陽炎様が居られますゆえ。陽炎様は、治癒の知識では並ぶものなきお人だそうですね。」

「陽炎？」

桃衣の言葉にまたもワケが分からなくなりそうになった示詩に、上から座龍が声をかけてきた。

「お姫さんには紹介がまだだったな。本当ならもつと然るべき場を用意するつもりだったんだが、こうなったら仕方がねえ。…こいつらは俺の腹心の『陽炎』と『光野』だ。あんたの役に立つこともあるだろう、覚えといてやってくれ。」

そう言つて座龍が陽炎と光野に目配せすると、二人は素早く示詩の前までやってきて、片膝をつき、頭を垂れた。

「お初にお目にかかります、正妃様。私は光野と申す者。国王陛下の近衛を務めさせていただいております。以後、お見知りおきを。」

抱えられていた竜脊の身はいつの間にか陽炎に渡されており、陽炎はどういう業を持ってしているのか、暴れる竜脊を片腕で抑えて示詩に膝をついていた。

「同じく、陽炎」

丁寧に教養が窺える口調の光野と違って、陽炎の言葉はぶっきらぼうかつ簡潔だった。

まるで対照的な二人を交互に見て、示詩は座龍に強い視線をやった。

「陛下。そろそろ教えて頂きたく存じます。私をここへお連れになられたのは何故でございましょうか」

二人の腹心の部下を連れて来ていたことで、示詩はここへ来たのがただ息子の我がままに付き合っただけではないという事実思い当たった。

そして、やはり、目の前の夫が、底の知れない人物かもしれない、ということにも思い至り始めていた。

だが、身を固くさせた示詩の様子とは裏腹に、座龍はあくまで飄々とした態度でこれに応じた。

「そういや、まだ教えていなかったか。だが、そんなに大した理由はねえんだ、これが。ただ、俺は、あんたにこの緋仔って男を会わせておきたかったのさ」

「緋仔？」

座龍が振り向いた先には、未だに前かがみになって大事そうに卵を抱えている、みすばらしい男の姿があった。

「あの男は……？」

「あいつはな、実力で言やあ、この国に置いて右に出る者のいない竜学士さ。俗に言う天才ってやつだ」

「あ、あの者が……ですか」

恐ろしく挙動不審な、風体の怪しい外見を見る限りでは、示詩にはとてもそうとは思えない。

「まあ、見かけや言動はちっとおかしいかもしれねえが、あいつは間違いなくこの国一竜に詳しい。沃賀のじいさんなんぞ、目じゃねえほどに……な」

「それは……」

軽く目配せしてきた座龍の意図を、示詩はすぐに読み取った。さきほど、応接室で二人きりで話していたことが思い出される。

沃賀を好きにさせてんのも、竜脊を放っておいてるのも、今はまだ機が熟してねえからだ。姫さんが言ったことはまったく骨身に染みる言葉だが、残念ながら今の俺にできることは限られてる。

「今はまだ、優秀な一介の竜学士に過ぎねえ。だが、今にあいつは、誰にも成しえなかったことをやらかしちまうだろうぜ。それを待ってみるつても、中々オツなもんだと思わねえかい？」

今はまだ。

示詩には、座龍の思惑が手に取るように見え始めていた。要するに、ここにいる者達は、皆、将来において歳火の重要な役目を担う者たちかもしれない、ということではないか。そして、この場に示詩を呼んだ、座龍のその意思とは。

「私を、どうしようと言われるのですか、陛下」

「おっと、そんなにおっかねえ顔はよしてくれ。あなたには何もするつもりはねえさ。……今はまだ、な」

「私とて、やられたままで居るつもりはありませんわよ」

「へっ、面白い。あなたは本当に面白いよ、お姫さん」

つかの間、男と女の視線に緊張が走った。

「あ、も、申し遅れました、わ、わたくし、緋仔、緋仔と申します、王妃さま！おみしりおきをお願いします！あんなひびじいなんかより、ぼ、ぼ、ボクの方が、将来性ありますんで、一つよろしく願いいたしますよ、へ、へへへへへへっ」

突然、緊張の糸を途切れさせるように、緋仔が二人の間に割り込んできた。

「こら、緋仔！正妃様にあまり近づくんじゃない！」

そこへ、光野がやってきて無理やり緋仔の体を引きはがす。

「な、なにを、ぼ、ぼ、ボクは、せいひ様にちよつと、あ、挨拶しただけ、だけですけどー！」

「挨拶はいい、お前の態度が問題なのだ！正妃様の御前でその見苦しい顔を近づけるんじゃない！」

「なななな、なにが見苦しい……み、見苦しい！？お、俺、見苦しい！？」

「鏡を見て来い、まったく」

ぎゃんぎゃんと言いあいを始めた二人の脇では、陽炎が黙々と竜脊の治療に当たっていた。

どういふ業を使ったのか、見ていなかったことが悔やまれるほど、竜脊の体からは傷が引き、青白かった顔も元の血色のよい様子に戻っていた。

示詩は、そつと隣に立つ夫を盗み見た。

光野と緋仔の言いあいをからからと大口を開けて笑っているその顔からは、何の思惑も見取れそうにはない。

だが、自分が何かの思惑に組み込まれ始めていることだけは、示詩にはひしひしと感じ取られていた。

おそらく、一筋縄ではいかないような何かに、巻き込まれ始めているのでは、と。

「正妃様、お早く御戻りになりませんと、ここは危のうございます」

「そうさな、姫さんはもう戻った方がいい。馬車ならさっきのを使いな。くれぐれも気をつけて行くんだぜ」

桃衣が促した所で、示詩は部屋へ戻るように言い渡された。

座龍の有無を言わせないような口調から、どうやらこれ以上示詩がここにいることに不都合があるらしいことが予測された。

竜研究塔。竜学士。沃賀。緋仔。竜脊。そして、座龍の腹心の者達…。

それと自分がどう関わっていくのかを頭の中で巡らせながら、示詩は竜研究塔を後にしたのだった。

暗い研究塔から外へ出ると、目を刺すような眩しい光が視界を覆った。

座龍一行は馬車に乗り込み、早々に陰惨で得体の知れない塔を離れた。

その様子を、塔の影から探っている姿があったことには、入口で見送っている緋仔だけが気づいていた。

其の四（後書き）

れ、恋愛……恋愛要素は、どじこ……
もじしばらくお待ちください……

其の一

ところで。

示詩の故郷である赤社、そして嫁ぎ先であり、夫・座龍の祖国である歳火を含む「四竜連合国」は、竜神教を掲げる邪九馬国やくまを宗主国とした歳火、濡羽ぬれば、業碧ごうへき、灰露かいろ、赤社の六力国から成っている。世界で最も広がりを見せる竜神教の租を自負する邪九馬国の皇帝は、世界を創世した神の子孫であり、宗教的権威を持つため、他五力国は事実上の従属国であるとされる。

だが、その中でも、それぞれ国家の権力には明確な差があった。四竜連合国の由来は、竜神教の正典によって預言される「終末思想」を元にした、四つの宝玉を管理する権利のある国の連なり、という意味から来ている。

そもそも、竜神教派の国々では『終末伝説』というのが常識に近いほど民間に浸透しており、老若男女知らぬ者なしの言い伝えとなっている。

世界が終末に近づく頃、陽読ひよみの巫女、月読つきよみの巫女が現れ、石読いしよみの御子の手を取りて、四つの石を携える。さすれば、世界に平和がもたらされん……

竜神教はどの国も巫女によって神事が執り行われ、力を持つ巫女は筆頭巫女としてあるいは王よりも手厚く待遇される場合がある。

それというのも、この『終末伝説』に登場する「陽読の巫女」「月読の巫女」が世界の救いの主として描かれる故であり、竜神教が世

界に広がりを見せた所以といっても過言ではなかった。

そして、その『終末伝説』でもう一つ重要なのが「四つの石」というくだりだ。

この四つの石とは、竜神教が祀っている四匹の神竜がその手に収めていると言われるもので、雷竜が収める「黒晶」、炎竜が収める「緋晶」、嵐竜が収める「白晶」、氷竜が収める「藍晶」から成る。

四竜連合国に属する国々は、この四つの石を賜うことで邪九馬に次ぐ宗教的権威を得ることが出来、また宗主国である邪九馬の信頼をも同時に得られるのだ。

とどのつまり、四竜連合国における国家間の優劣差というのは、この「竜宝玉」と呼ばれる石を持っているか否か、ということに他ならない。

現在竜宝玉を所有しているのは邪九馬、業碧、歳火、灰露であり、表面上、他二国はこの四力国より劣るということになる。

それを巡って、邪九馬を除いた四竜連合国間では、今日まで幾多の熾烈な争いが繰り広げられてきた。その結果四つの石は様々な国を行き来し、力を見せつける道具と化している。

畢竟、長く石を保有し続ける国は自然と国力が勝っているということになる。

歳火国は、歳火国史が編纂された時代から今日まで一度も「緋晶」を手放したことがない国として有名だった。

そして業碧も同じく国の興りから「藍晶」を手放したことがないと言われる。

その二国が互いの優劣に決着をつけるためしのぎを削ったのは、まだほんの七年前のことであり、そしてその戦いを終わらせたのが、何を隠そう、示詩の夫となった第二十一代めの歳火国王、座龍だった。

だが、昨今、そんな風に竜宝玉の所有率によって権力を争っていた国々に、衝撃が走った。

なんと、歳火の隣国・濡羽が、「月読の巫女」を召喚したというのだ。

「納得、いきませんわー！」

「そうくると思ったが、まったく予想に違わねえ反応だな、お姫さん」

とつぷりと日の暮れた深更の夜。

緋竜城の最上階、広々とした国王の寝室では、新婚夫婦による不毛な争いが繰り広げられようとしていた。

「何故、何故私と臥所を共にすることを拒まれるのです！！昨夜も、一昨日も、その前も、その前の前の日もです！一体、私に何の不満があるかと仰せなのでしょうか！？」

喧々囂々と言い放つ示詩を前に、座龍は幾分うんざりとしながらも苦笑いを浮かべて、とりなす様に優しく語りかける。

「拒んでいるわけじゃねえさ。ただちょっとした事情で、今子供を作っちゃうとまずい事態になってだな……」

「さようございしましたか。では、どういった事情がおりで、ど

うまずい事態におなりなるのか、しかとお聞かせいただけますのね？」

「うっ、いや、それはだな……」

「陛下!？」

容赦のない示詩の勢いに、座龍は表面上たじろいでみせるものの、冷静な頭の中では様々な思考を巡らせていた。

さしあたって、鼻っ柱の強いお姫様を、どうやって静かにすべきかを最優先に。

(だが、くいでないわけじゃねえ)

座龍は、むっとした顔つきで怒りを露わにする新妻の、そのつき出て尖った唇を上げしげと眺める。

赤く色づいて、ぷっくりと熟れていて、実にうまそうだ。

時々忘れそうになるが、この赤社から来た気の強いお姫様は、基本的には絶世の美女の要因を兼ね備えているのである。

しかし哀しいかな、本人の癪がとても強く、たおやかに欠けるため、外見よりも内面が目立ってしまった。

その上、深窓のご令嬢だった為か、男女の機微にことさら疎く、男をものにする方法を完全にとり間違えているふしがある。

そのくせ妙に世慣れているため、姬らしくなく自立心が旺盛で、世辞や政局の動きに関しても驚くほど頭の回転が速く、理解力に富んでいた。

これでは、座龍にしてみれば、妻というよりも未熟な子供の参謀を手に入れた、という感覚に近い。

座龍の女の好みというのは、その真逆に位置する様な性技の熟達した大人の女なのだからして。

……平たく言うと、遊女小屋の遊び慣れた女で十分間に合っている、ということだ。

そして座龍には、遊び以外で女に入れ上げる予定など、今のところ微塵もない。

従って、正妃であることを理由に示詩を愛する道理も、座龍の中にはないといえる。

(…まあ、それは抜きにしても)

女として愛することは難しいが、座龍はこの少々勢いの良過ぎる姫のことを思いのほか嫌ってはいないのだった。

何しろ、反応が普通の女と違って面白い。

一を言えば十を知るし、かと思えばちよつとした戯言にもすぐむきになる。

姫とは思えぬ言動をとったその次の瞬間には、いかにも姫らしい態度で凜とした言葉を放つ。

最初こそ田舎者の世間知らずと鼻白んでいたが、座龍の目にはなかなか骨のある好ましい人物に映った。

特に、座龍の騎竜である天轟を前に、泣き喚くどころか狭い天幕内でも一向に逃げ出すそぶりを見せなかったとの報告を聞いた時には、彼女が姫であることを惜しんだほどだ。

歳火が伝統とする騎竜乗りになるには、まず竜を怖がらないというのが大前提だ。

実は、この条件を乗り越えられずに騎竜兵入団試験に落ちる者は決して少なくはない。

いかに竜を身近に過ごす歳火国とはいえ、竜は平時であれば害獣に過ぎず、そして対峙できる者も限られている。

そのため、騎竜兵志願者には、竜と顔を合わせる前に具合が悪くなったり、逃げ出したり、動けなくなる者など決して珍しくはないのだ。

そこをいくと、もし示詩が騎竜兵志願者であれば、まず第一の関門は突破しているということになる。

並みの姫ではこうはいかないだろう。

いや、姫でなくとも、女であればよほどの度胸が備わっていない限り、すぐ泣き喚いて逃げ出すのが普通の反応といえる。

ともかく示詩という姫は、座龍の思惑から少しずつずれている人物なのだった。

最初はただの駒だと思っていなかったのにな、とひとりごちて、座龍はそろそろ待ちの姿勢が限界に達しそうな目の前の姫を見下ろす。

広い寝台で、美しい妻は薄絹をまとって香油の匂いを漂わせ、夫のごく間近に座している、というのに……

考えてみれば、こんな状況は座龍にとってもはじめてかもしれない。ただ一人を除いて、彼にとって女とは、ただ性欲を満たすだけの存在でしかなかった。

寝台の据え膳のような女を目の前に手を出さない自分を不思議に思いついながらも、座龍は思いついた提案を言い渡すべく口を開いた。

「まあ、ここは一つ、整理をしてみようじゃねえか」

「せ、整理？ 一体何のことをおっしゃっているのでしょうか」

「俺たちの目的をはっきりさせようつてのさ。まず、姫さんだ。あなた、一体この俺の妃となって、何を望むんだ？」

座龍の突然の言葉に、うまくはぐらかされたことにも気づかず、示詩はその小作りの整った顔をしかめさせる。

「私の、望み。それを聞いて、どうなさるというのです？」

「そりゃあ、俺たちの仲を良くしていくための方法を考えんのか。お互い、譲歩できる所とできない所を、目的をはっきりさせた上で知っておけば、接しやすくなんだろ？ 夫婦つてえのは、そういうちよっとした努力が円満に繋がるっていうからな」

「まあ…そうでしたの」

本当は今思いついたのだが、そんなことを馬鹿正直に教えるつもりはもちろんない。

「そつですわね、私は……」
「おつ」

一体、その綺麗なお頭でどんな突飛なことを考えているのか、少し期待しながら、座龍は次の言葉を待った。

「私の望みは……この国の国母となり、歳火を立派な国へ導くこと
でございますわ」

「へえ！こりや大きく出たもんだな」

「特に難しいこととは思っておりません。なにしろ、この私の望み
には、陛下の協力が不可欠なものでございますゆえ」

「……ガキなら作らねえぞ」

「いいえ、そうは参りませんわ！まず己の子を産み、この歳火で確
固たる地位を築くことが私にとっての当面の課題となるのです！そ
れには是非、陛下にご協力いただけませんことには……」

「わかった！とりあえず、姫さんの望みってえのは、よく分かつ
た。次は俺の番だな」

放っておけば延々と続きそうな示詩の主張を遮って、座龍はその薄
い両肩にポン、と手を置いた。

一瞬、びくつと震えた示詩だったが、負けず嫌いがそれを認めるの
を良しとしなかったのか、彼女は逃げだすそぶりも見せずに顔を強
張らせ、夫に相對する。

やはり、およそ蜜月の夫婦の寝台には程遠い。

「俺の望みも、大体あんたと同じだ。この国を良くする、これにつ

きらあ。だが、ガキはもういらねえ。何故分かるか？」
「……………いいえ」

示詩がゆっくりと首を横に振ったのを見てから、座龍はふっと遠い目つきをして言った。

「争いの『モト』なのさ、兄弟つてのはな。事実、俺の兄貴は全員俺を敵視してやがるし、父親にいたっては命まで狙っていやがる。俺は、自分のガキにはそういう目に合わせたくはねえのさ。……血が繋がってるつてのに、それが殺しの理由にしかならねえなんざ、悲しすぎる。そうは思わねえかい？」

示詩はしばらく考え込んでいるようだった。視線をやや下に向けたまま、身じろぎもしない。

座龍には、竜脊以外の子供を作らない理由が他にもあったが、今言えるのはその程度のもだった。

そして、女子供に有効なのはこういったお涙頂戴の人道的な理由であることも、座龍は熟知していた。

だが、さすがといおうか、やはり示詩という姫は、座龍の思惑から少々ずれた人物だった。

予想の斜め上に行く答えが返ってきた。

「承知いたしました。では、生まれた子供は、私が赤社国の名にかけて、きっちりと教育いたしますわ。もちろん、竜脊様も、己の子と隔てなくお育てすることをお約束いたしますよう。これなら、陛下も安心して御子をおつくり頂けますでしょう？」

「…ふむ、そうくるか」

座龍は完全に苦笑である。

普通は、正妃が子供を産むことを拒否されたら身投げしても良い様な状況であるはずが、やはりこの示詩という姫は、面白い。座龍は、段々とこの姫の提案に乗りたくなってきた。だが、そうそう悪乗りして楽しめるような内容ではないため、辛くも断念し、かわりに別の提案を用意することにした。

「なら、勝負でもしてみようかい？」

「し、勝負、ですか？」

示詩にとっては、座龍こそが己の予想の斜め上に行く答えの持ち主だったろう。

目をまん丸に見開いて驚愕しているのを隠しだてもせず、示詩は座龍の瞳をまじまじと見ていた。

その真つすぐで純粋な瞳に、ふと邪心が芽生えたものの、それを無視して座龍は言った。

「なに、簡単な勝負だ。あんたが俺をその気にさせりゃいいだけさ」

「は……はあ」

「要領が分からねえって顔だな。そんな顔を見せてるうちは、到底俺のガキを孕むなんざ無理だぜ。やめちまうこつた」

「なっ……い、今は、あまりにも急な提案に、少々心の準備が間に合わなかっただけですわ！」

「そうかい、じゃあ、やるんだな？」

「も、もちろんですわ！」

威勢はいいが、座龍が見た所では、おそらく示詩は自分がどういうことを言ったのか分かっていないだろう。

いかにも処女らしい反応が何よりの証拠だといえる。

「そんならさっそくやってみな。そら、遠慮はいらねえ。やってく

んな」

「い、言われずとも、ま、参りますわ」

座龍は示詩の両肩を掴んでいた手を放して、少しだけ身を引いた。すると、示詩はそれにも過剰な反応をして、体一つ分後ろにのけぞった。

笑い出したいのをこらえながらそれを見て、座龍は処女おとめである妻のお手並みを拝見しようと、軽い気持ちで成り行きを見守っていた。示詩は、すでにいっぱいいっぱいいな体でありながらも、瞳に強い意志の炎を宿して、座龍に挑みかかってきた。

女で、深窓の姫で、その上未通女となれば、およそ性技で男をその気にさせるなど、容易ではない。

何も分からずに無理難題に挑戦しようとしている姫の必死さを余裕で見物していた座龍は、しかし、この後自分が窮地に立たされようなど夢にも思つてはいなかった。

示詩はどう攻めあぐねるか少し考えた末、突然、帯をほどいて薄絹を脱ぎ始めた。

(何!?)

座龍は度肝を抜かれた。

これほど驚いたことは幾久しい。

それほど衝撃の場面を目の当たりにしていた。

まさか、少々変わっているとはいえ、深窓の姫が、れっきとした由緒ある国の第一王女が、よもや自分から衣服を取り払うとは、少しも思いいたらなかった座龍である。

それも示詩は、見た所多分に自信たっぷりの、かなり高慢な性格であるはずだ。そういった女が、姫の自尊心をどぶに捨てるような真似をするとは、思いもよらなかった。

そして、同時に、よくわからない性欲がつきあげてきている自分に

も、座龍は驚いていた。
薄絹を取り払って襦袢したきだけになった示詩の体は、細いながらも優美な線があらわになり、改めて彼女の美しさを再認識させられる。
処女おとめだ、姫だと侮っていた己の判断を、座龍は早急に修正しなければならなかった。

この少女に対して、そんな要因は一つも影響を及ぼさない。
裸にさせてはいけない。

やはり、寢所を共にするわけにはいかない。

「いやー、だめだだめだ、やっぱそれくらいじゃ、とてもじゃねえがガキはやれねえな」

「なっ、ま、まだ、私は何も……」

「悪いな、姫さん。今日は時間がねえんだ。今ので今夜の勝負はついたことにしてくれ」

「へ、陛下！」

「また明日な。せいぜい頑張って色気づいてくれ」

座龍は薄絹をかき集めて纏う示詩を残して、さっさと寢所を出て行った。

重厚な黒塗りの扉を開いて、「卑怯ですわ！」と喚き立てる妃の言葉を背中に、階下への階段を下りはじめた。

(卑怯けっこ。…今の勝負は俺の負けだ、姫さん)

座龍は、そんな自分を嘲笑うように緩く首を振って、口角を上げた。廊下の窓枠に切り取られた空の、高く上がった月を見て、思う。

やはりあの姫は、俺の思惑からずれていく。
はっ、と短く嗤うと、座龍はゆったりとした動作で歩きだし、暗い廊下の闇の中へと姿を消した。

そんな風に、歳火の若い国王夫妻の夜の勝負は、口火を切られた。

其の一（後書き）

少し甘さを織り交ぜる努力をしてみました。が、まだまだ全然です。ね。
精進します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4649s/>

うきぐもがたり

2011年11月1日12時18分発行